

41738

教科書文庫

4
810
41-1931
20000 86995

Kodak Gray Scale

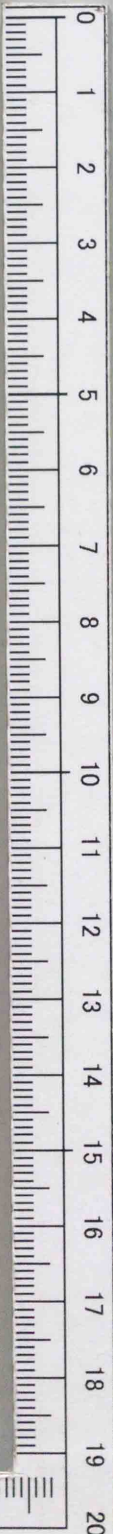
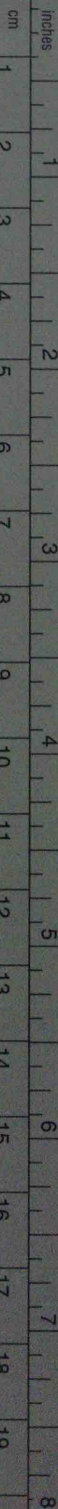
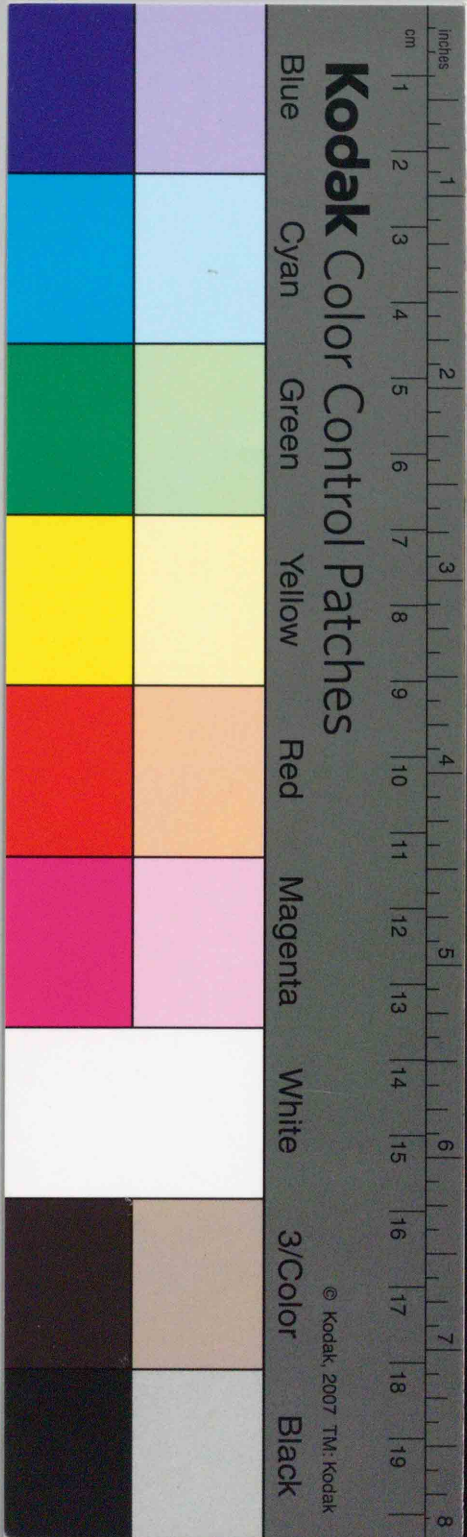
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



4a
810
BB6

國文 新制第一版 卷二



文 部 省 檢 定 濟

中 學 國 語 漢 文 科 用 昭 和 六 年 十 月 二 日

資 料 室

富 山 房 編 輯 部 編

# 國 文

新 制 第 一 版

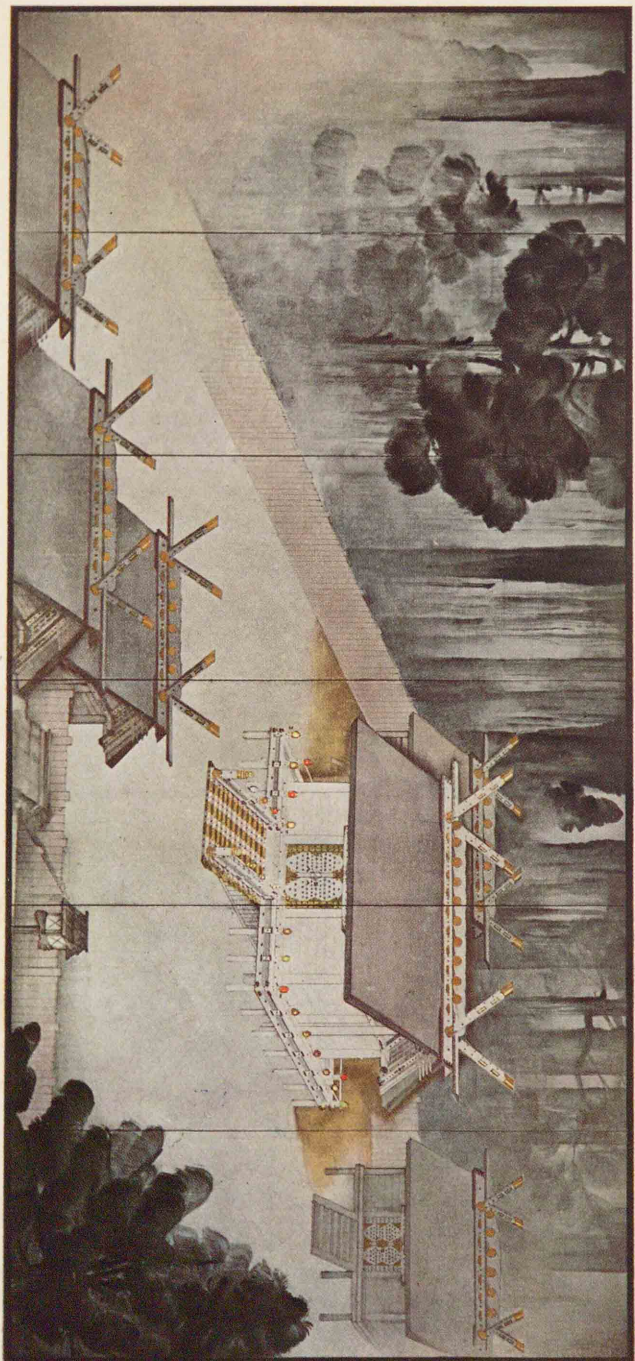


東 京 富 山 房 神 田

4a  
810  
BB6



筆 卯 龍 谷 萬



宮 神 勢 伊





國文 卷二 目次

○ 一世の恵(詩).....	百田宗治..... 一
○ 二 仕事をする興味.....	小酒井不木..... 二
○ 三 一萬メートル(自修文).....	土岐善麿..... 七
○ 三 木曾川の渡守.....	吉田紋二郎..... 三
○ 四 天下の寶.....	..... 二五
○ 五 月の天橋.....	徳富健次郎..... 二九
○ 六 鐘の音.....	奥田正造..... 三六
○ 七 さわやかな心その一.....	河野省三..... 四二
○ 八 さわやかな心その二.....	河野省三..... 四八
○ 九 良寛さんと鵬齋先生(自修文).....	(雄) 辯..... 五三



九	知行合一	南條文雄	六
一〇	日本外史よりその一	頼	六
一	後三年の役	襄	六
二	牛若奥州に下る	七	六
二	日本外史よりその二	頼	六
三	高德櫻樹に題す	襄	六
四	義貞鎌倉を攻む	充	六
三	日本外史よりその三	頼	七
五	川中島の戦	襄	七
六	將門將を出す	七	七
三	甲賀孫兵衛	大町桂月	七
四	冬木立	若山牧水	八
五	造化のたくみ(詩)	土井晩翠	八

一六	多摩御陵に詣でて	九	
一七	國家と祭祀その一	芳賀矢一	七
一八	國家と祭祀その二	芳賀矢一	一〇三
	× 禮儀作法(自修文)	芳賀矢一	一〇
一九	南洋探検	澁川玄耳	二八
二〇	我が幼時	新井白石	三三
二一	勁松は歳寒にあらはる	三六	二六
二二	良雪和尚	(義士餘談)	三三
二三	大石家の離散(自修文)	福本日南	四四
二四	希望(詩)	白鳥省吾	四七
二五	人工樂園	堀口大學	四八
	雪路をひらく(詩)	井上康文	五五
二六	春を待つ	北原白秋	五五



○ 六	梅の花……………	谷口梨花…二五
○ 七	雑草……………	相馬御風…二六
六	鳥の美……………	飯島魁…二六
	九官鳥と鶯(自修文)……………	土岐善磨…二七
元	忘れ得ぬ人々……………	國木田獨歩…二七
○ 三	愛國心……………	大島正徳…二七

# 國文卷二

(一) 詩人。大阪市  
の。明治二  
十六年生。

## 一世の恵

(一) 百田宗治

東の間

日の光翼にうけて、  
 けふもまた青空たかく  
 翔り行く飛行機いくつ。  
 東の間に姿隠しつ。

外國ぶり

海山を遙か隔てて、  
 ゐながらに遠き歌聴き、  
 めづらしき外國ぶりの  
 風俗も、いま眼のあたり。



更けし夜の燈火のもとに、  
書よみひらきよみつゝ思ふ、

世の恵、人の力の

たえまなく身をばめぐるを。

たえまなく進み行く世の

いと深き恵うけつゝ、

われもまた勵まざらめや、

朝夕あすけの學まなびの業わざを。

○ 二 仕事をする興味

(一) 小酒井不木

とかく人は、自分の仕事よりも、他人の仕事を羨ましが

(一) 小説家、醫學  
博士、名は光  
次。愛知縣の  
人。昭和四年  
歿。年四十。

ものである。これは言ふまでもなく、どの仕事でも、表面から  
見れば樂な様に考へられるからである。だから、いざ他人の  
してゐる仕事に従事してみると、始めてその苦しさがわか  
り、やつぱり自分が今まで従事してゐた仕事が懐かしくな  
つてくる。若しすべての人が、仕事をする事その事に興味を  
感ずるならば、仕事の種類は問題でなくなるであらう。

どんな職業に従事してゐても、決して職業が人間の品性  
を左右するものでなく、職業に従事する人の心の如何によ  
つて、その職業は賤しくもなり、また貴くもなるものである。  
職業の爲に手や足を汚染する事は、決してその心を汚染す  
る事ではなく、寧ろ却つてその心を清淨せいじやうならしめるものだ



毛頭

(Solomon)

昔西部アジヤ

(今シリヤの

南西部)にあ

つたイスラエ

ル王國第三代

の王。明君と

して名高く、

その治世はイ

スラエルの全

盛時代であつ

た。(西紀前

九三七年)

(John Tyler

第十代の大統

領。(西紀一

八七

二九〇

年)

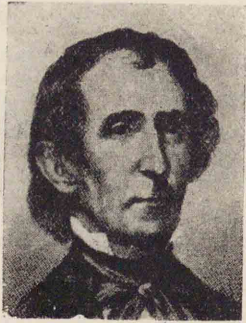
政敵

平然

と言つてよい。外見上汚い職業に孜孜として働いてゐる人の姿を見る時には、崇高を感じこそすれ、汚いといふ感じは毛頭起らないものである。ソロモンの箴言には、「汝かの事務に勤勉する人を見ずや。彼は王者の前に立つ事を得べし」とある。

アメリカの大統領タイラーといふ人が、任期が満ちて辭職すると間もなく、彼の政敵は彼を嘲弄する積りで、彼を彼の居村の測量係に選舉した。するとタイラーは厭がるかと思ひの外、喜んでその職を引受け、しかも一所懸命に仕事をした。これには流石の政敵たちも降参して、「もういゝ加減に辭職してはどうですか」と勧めると、タイラーは平然として、

(一)大學第六章に出てゐる。



タイラー

「私はどんな仕事でも引受ける代りに、一旦引受けた以上、決して辭職などはしません」と返答した。

仕事は人間を尊くするばかりでなく、人間を危険から遠ざからせる唯一の方法である。小人間居して不善を爲す。といふ言葉があるが、小人に限らず、すべての人間は、ほんやりしてゐる時には、ろくな考は出さないものである。統計を見ても、倦怠は各種の犯罪の極めて重大な原因となつてゐる。

また人は、とかく仕事を早く成し遂げたいと希望する傾向がある。言はば、成功を急がうとするのであるが、これは畢



(1) Charles Robert Darwin. イギリスの自然科學者。進化論を唱へた。西紀一八八〇年。

(2) Oliver Goldsmith. イギリスの詩人。西紀一七七四年。

(3) Edward Gibbon. イギリスの歴史家。ローマの衰亡の跡を著し。西紀一七九四年。



ゴドロードスミス

竟するに、勤勉勞苦その物に快樂を發見し得ないからである。眞に勤勉な人は、一面から言ふと、頗る氣が長い。ダーウィンのみ、ずの研究は、實に前後三十年間もかゝつてゐる。文豪ゴードスミスは、一日に四行づつ書けば十分な仕事だ」と言つて、荒村行を書くのに前後七年を費し、しかもその四行づつを書くのに、一日中かゝつて、うん／＼苦しんだのである。また有名なローマ衰亡史を著したギッポンは、第一章を三度書直して、始めて満足したと言はれ、全篇を完成するのに、實に二十有餘の歳月を費した。人間はいかに努力し勉強しても、若し勞苦その物に快樂

(1) Henry Morton Stanley. イギリスの有名なアフリカ探検家。西紀一八四一—一八七〇年。

(2) 歌人、新聞記者。東京市八年生。

を覺えるならば、決して過勞といふ現象は生じない。それが生ずるのは、成功を急ぐか、または勞苦に興味を持たぬからである。だから、スタンレー卿も「どんなに劇しい仕事をして、確乎として規律正しく進んで行きさへすれば、決して身體を害するものではない」と言つた。實際若し過勞の爲に病氣になつた人があるならば、私はその人が仕事に對して、興味を持たなかつた證據だと思ふのである。——新定國文——

自修文

一萬メートル

土岐善麿

三周……四周……

その頃から選手の間隔が著しく違つて來た。

一萬メートル(自修文)



新しい記録  
今までの最も  
優秀な成績を  
越した成績。

(1)metre.  
(米、米突)

(2)track.  
走路のこと。

即ちランニン  
グ、ハードル、

リレー等を行  
ふ爲に造られ

た特別の走路

(3)hurdle.  
ハードル・レ

イス(trape)の

略。障礙物を

跳越える競走

(4)relay.  
リレー。レ

イスの略。或距

離を數人が分

擔して走る競

走。

(5)start.  
出發のこと。

(6)stand.  
觀覽席のこと。

どよめく  
聲をあげて騒

東西對抗の陸上競技も今年には第五回で、その決勝に出場すべ  
き選手たちの意氣は、關西も關東も猛烈で、新しい記録が期待さ  
れた。

この一萬メートルも、今年からはトラックで行はれる事になつ  
たから、觀衆はひと目に選手の力量、技巧、並びに作戦を大觀する  
事が出来るわけで、四百メートルのハードルや、千六百メートル  
のリレーなどと共に、トラックの新しい興味になつてゐたのであ  
る。

何しろ一萬メートルと言へば、里程にして約二里半、四百メー  
トルのトラックを二十五回まはらなければならぬ。一人てゆつ  
くり駈けるさへ、いや歩くさへ一通りではないのに、一著、二著を  
争つて多數と競走するのである。選手連の日頃の練習の程も思  
はれて、スタートと共に、晩秋の風冷き神宮外苑スタンドはどよ

(1)style.  
姿勢のこと。  
こゝでは身じ  
たくのこと。

へうきん  
氣輕で滑稽な  
こと。

逸速く  
すばやく早く  
すばやく。

風體  
すがた。みな

愛敬  
かはいげのあ  
ること。人ぞ  
きのすること。

めいた。……



神宮外苑に於ける競技

長距離なので、百メートルや二百メ  
ートルなどの様にスタートの息づま  
る程な緊張きんぱうさはないが、數も多く、スタ  
イルも思ひおもひ、色様々な賑はしさで、  
選手は各自その練習の程度と姿勢と  
を守りつゝ、快走する。

その中に一人、へうきんな赤帽を冠  
つて、頸のどにちよびひげを生はした選手が  
ゐた。地方の青年團の一人であつた。ス  
タートの時から逸速いひやくくその風體ふうていが觀  
衆の目を引いて、競技場の空氣に一種の愛敬あいぎやうを作つた。が、彼は十  
周くらゐから、何時か先頭の選手より一周近く後れてしまつた。



審判 事件を審理し  
て判断するこ  
とは、審判委員  
は、いはゆるア  
ンパイアで、ア  
ンパイアの開始  
中止、終了、探  
點及び反則者  
の處罰等の權  
能を有する。

まつしぐらに  
勢よく進みか  
かるさま。い  
つさんに。眞  
一文字に。

落伍者 仲間以後れた  
人。落伍は團  
體に後れ離れ  
ること。  
ねばり強く  
しんばう強く  
拭ひもあへず  
よく拭ひもせ  
ず。いそぐさ  
まにいふ。

審判委員の一人は、選手が審判臺の邊へくる毎に、回數をしるした紙をめくつて、「あと何回」と呼びかける。これが選手を一層元氣づける。あゝ、一周、一周と減つて行くその回數の痛快さよ。しかし、一周後れた選手に對しては、尙その一回だけを多く呼びかけられる事は言ふまでもない。そのたびに赤帽の選手は、にこくと審判員に微笑を投附けて通過する。そしてまつしぐらに走路をたどる。

最初スタートの線上にあふれる程であつた選手も、一人また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消して行く。さういふ落伍者のある中に、後れても最後までと、彼はねばり強く、兩脚の筋肉に青春の意氣をみなぎらせつゝ、額の汗を拭ひもあへず、しかも悠々と、急がずあせらず、一周、一周とトラックの土を踏固める……

彼は一周後れたので、先頭のすぐあとを追つて行く。一周の差さへなければ、さながら先頭を争つてゐる様にも見える。

「赤帽しつかり。」

「ひげさん頼むよ。」

豫選なので、競技と言つてもこんな聲援に、どこかくつろいだ空氣も漂ふ。やがてピストル一發、既に第一著、第二著は決定したが、尙一周餘、彼は依然として、悠々とトラックを駆けて、自分だけの最後のダッシュも鮮かに、決勝點を踏んだのであつた。しかし、それはもう「決勝點ではなかつたが。」

その勝敗を眼中に置かないで、走るだけは走るといふ態度の痛快さに、スタンドの觀衆は、思はず一齊に、第一著の勝利者に送つたと同様な拍手を彼に送つた。彼は始めて赤帽を脱いで、それを右手に振りながら、にこくと退場した。

豫選 出場資格を決  
定する爲に行  
ふ勝負。  
くつろぐ  
ゆるやかに  
なる。しかくば  
らない。  
Pistol. 短銃。  
拳銃。短銃。  
(二) Pistol.  
突進。



生活態度  
この世の中に  
生活して行く  
その心がまへ  
心境  
心のうち。心  
もち。

(一)小説家。名は  
源次郎。佐賀  
縣の人。明治  
十九年生。

一萬メートル。その競走には、この選手が勝利者でなかつた事は明らかである。しかし、人間としての生活態度に於て、決して彼は敗北者ではない。彼は最後まで自分の力を信じ、他を顧る事なく、明快な心境をもつて走つてゐたのである。

### 三 木曾川の渡守

吉田絃二郎<sup>(一)</sup>

渡守といふ名は、聞くからに古風な感じがします。汽車が出来、鐵橋が出来た世の中では、古風な渡守といふ様な仕事は益なくなつて行きますが、出来るならば何時までも、渡守といふ古風な仕事は、世に残して置きたいものだと思ひます。

馬も、自轉車も、荷車も、旅人も、猿廻も、男も女も一つの舟に

そぼ降る  
情景

(一)織田信長の時代。  
(二)豊臣秀吉の時代。織田豊臣時代は正親町、後陽成天皇の御代に當り、凡そ二二三年間である。

乗つて、小雨のそぼ降る中を、靜かに流を横切つて渡されて行く舟の情景などは、確かにゆかしい繪になつてゐます。三四年前の事でした。私は名古屋に行つて、それから犬山城へ廻つて、城の下から一艘の舟を雇つて、木曾川を下つた事がありました。名古屋を包んでゐる大平野には、蓮の花が到る所に薰つてゐました。鈴鹿や伊吹などの山々が、晴れわたつた空の彼方に仰がれました。織田<sup>(一)</sup>、豊臣<sup>(二)</sup>時代を通じて、この邊一帶の山野は、千軍萬馬の馳驅する巷であつたのです。が、秋近い青田は濃尾の平野を埋めて、白雲悠々、一鳥啼かぬ靜寂の氣が漂つてゐました。

その時、私は若い船頭が、舟を操りながら、ぼつり／＼と昔



其所に住んでゐた渡守の物語を續けるのを聞きました。大きな感動を受けて聞いたその話を、私は今だに忘れずにあります。

何時の頃であつたか、或秋の日、突然旅の若者が、木曾川の岸の松林にたどり着きました。まだその頃は、その松林のあたりには、猪が出て來たり、狐や狸が、犬の様に日中でもごろごろ寢轉んでゐたりしました。

旅から來た若い男は、もと可なりな身分の侍であつたと見えて、刀なども立派なのを持つてゐました。

若者は、自分で山の木を伐り、小屋を建てて、美濃の方の岸に住著きました。

難澁

(拵)

その頃は、まだ渡舟といふものが、その近くにはなくて、旅人は大變難澁してゐました。

若者は、山の木を伐倒しては、斧を振上げて、頻りと何かこしらへてゐました。一箇月許經つと、この若者の手で一艘の舟が出來上りました。

若者は、美濃の方の岸から尾張の方の岸へ木曾川を横切つて、夜も晝も舟に棹さして、旅の人たちを渡して遣りました。しかし、不思議な事には、決して自分から賃錢を請ふ事をしてしません。氣の毒だと思つて賃錢を支拂ふ人があれば、僅かの賃錢をもらつたり、または辨當の残りなどを代償としてもらつたりするに過ぎませんでした。



間牒

美濃の國の役人たちも、尾張の國の役人たちも、最初はきつと敵の間牒だらうなどと疑つてゐましたが、雨の日など旅人が通らない時には、一人で小屋の中で觀音經を讀んでゐて、餘念もありませんでしたので、何時しかその疑は晴れてしまひました。

或年の秋、ちやうど二百十日頃の大暴風雨の日でありました。美濃の國の大名が、急に江戸へ行かなければならない事になつて、大急ぎで木曾川の岸まで駈けつけました。お伴の人々を合せて、主従七人連でありました。しかし、どの渡場でも、金をどれ程澤山積んでも、命が惜しいから、舟を出さうと言ふ船頭は一人もありませんでした。大名は困つてしま

せつば詰る

(濡)

ひました。その日すぐ木曾川を渡らなければ、江戸へ到着する日限が切れてしまふから、場合によつては、殿様は腹を切らなければならぬかも知れぬといふ、せつば詰つた場合だつたのです。お伴の人々は叩きつける様な大暴風雨の中に、ずぶぬれになつて、岩をも山をも呑みさうな怒濤を空しく眺めて、蒼白い顔をして、立つてゐるばかりでした。

篠突く雨

その時一人の若侍が、ふと川上の松林の中の渡守の事を思ひ出しました。彼は馬を馳せて、篠突く雨の中を、二里許も松林の小屋をさして飛んで來ました。小屋に著くや否や、若侍は馬から下りて、その入口に立つて、これ船頭、一生の願ぢや。誠にお氣の毒ぢやが、この荒波の中を、一命を捨てる



折入つて  
火急な用

思つて、舟を出してはくれまいか」と折入つて頼みました。

「それはまた何ぞ火急な御用でも御座いますか。今まで読んでゐた観音經から目を放して、かの渡守は若侍に尋ねました。そしてすぐ小屋の前を、大吹降りの中を、もの凄く逆巻いて流れる濁水の上に目を遣りました。とても舟は出されまいといふ様な不安な色が、渡守の顔に浮びました。

「實は殿様が火急なお召で江戸へお越しになるのだが、若し今日中にこの川を渡つて行かねば、或は御切腹にならなるとも限らぬ。若侍はもう堪らなくなつて、ぼとりと涙を落しました。

若侍の涙を見ると、今まで思案してゐた渡守は、忽ち決心

したらしく、「では、舟を遣つて見ませう。私に出来るか出来な  
いか知れませぬが」と、力を籠めて申しました。

「忝い。それでは舟を遣つて下さるか。若侍は、地に額をすり  
つける様にしてお禮を言ふと、すぐ再び馬を馳せて、いら  
らしながら待つてゐた殿様や家老たちの所へ歸りました。

若侍の報告に接した殿様や家老たちは、救はれたと思ひ  
ました。しかし、渡場の役人や船頭たちは、「あの松林の中の素  
人船頭に、この川が渡せて堪るものか。お氣の毒だが、殿様始  
め一同の死骸が、今に川上から流れてくるに違ない」と、あざ  
笑つてゐました。

殿様や家老たちは、若侍の後から馬を列ねて、川上の松林



の方へ、暴風雨の中を急ぎました。

「ともかくも、力の限り舟を遣りますが、親代々の船頭でさへお断り致しますこの荒空に、私の様を俄船頭ではおぼつかないかと思ひます。しかし、どうせ江戸城でお腹を召されるくらゐなら、この荒波の中でお果てなされても、武士としての御名は立ちます道理。どうぞ討死の御覺悟でお舟へ……。」と、渡守は言ひました。その言葉は、世間の船頭たちのとは違つて、いかにも凜として、力に満ちてゐました。

「いかにもさうぢや。喜んで死の川へ乗出すのぢや。」と言つて、殿様は眞先に舟へ乗移りました。

七人の主従を載せた一艘の小舟は、不思議な船頭に操ら

## 凜

れて、逆巻く濁流の中へ突入りました。嵐は百獸の咆える様な音を、眞暗な空に立てました。波は幾度か舟を呑んでしまはうとしました。七人の乗客は、生きた心地もなく、舷にしがみ附いてゐました。唯一人渡守だけは、凜然として艫に立つて、聲高らかに觀音經を誦しつゝ、自由自在に舟を操りました。とても人間業とは思はれぬ程の沈著と熟練とをもつて。川下の渡場の役人や船頭たちは、七人の武士の死骸を待つてゐましたが、遂にそれらしい物は流れて來ませんでした。その代りに、松林の渡守が見事に七人の武士を尾張の岸へ渡し了せたといふ事を間もなく聞きました。その上にかの渡守は、千兩といふ大金を殿様から戴いたが、それを残ら







は、一言も漏しませんでした。尋ねられると、何時も唯ほゝゑむだけで、口を開いて自己を語るといふ事はありませんでした。

木曾川の岸には幾艘もの舟が繋いでありました。その繋いだ舟の中には水車がしつらへてあつて、それが絶えず水を蹴つて廻轉してゐました。

「あれが金華山のお城ですよ」と、船頭は北の方を指さしました。其所には高い岩山の上に、白い城壁が夕陽を浴びてゐました。落日の光は遠く近く連なる一帯の山々を、ほんのりと包んでゐました。

私の若い船頭は、頻りに棹を突張りました。川の面には夕

(一) 岐阜市の東郊にある。一名岐阜山といふ。岐阜城の址。

(一) 岐阜縣(美濃國)羽島郡。岐阜市の南方八キロメートル。木曾川の河港をなしてゐる。

(二) 支那の戰國時代の國の名。今の直隸省大名府の地。  
(三) 武侯の子。名は魯。西紀前三三五年歿。前在位三十六年。  
(四) 同時代の國の名。今の山東省青州府の地。  
(五) 桓公の子。名は因。西紀前三三三年歿。前在位三十六年。  
狩しける時。西紀前五五〇年の事である。

霧が漂ひ始めました。笠松の町が土手の上に現れて來ました。  
——かゞやく小川——

### 四 天下の寶

昔、支那の魏の國の惠王、齊の國の威王と共に狩しける時、齊に寶あるか」と問ひけるに、威王「なし」と答へければ、惠王の言ふ様「我が國は小さけれども、わたり一寸の珠の、よく車の前後各十二乗を照すもの數多あり」と、いと誇らしげに語りければ、威王の言ふ様「我が寶は王のと異なり。我に四臣あり、これに國政を委ねて、内よく治り、外また侮をふせぐ事を得たり。車十二乗を照す珠のたぐひならんや」と言ひけり。惠王



欠員トナル

白旄

聞きて、恥づる色ありけりとぞ。  
 これに似たる話は、かの國に尙傳へられたるが、徳川家康にもよく似たる物語あり。  
 或時、太閤秀吉、家康に向ひて、天下の珍器は我皆これを藏せり。子の寶とするは何物ぞ。と問ひければ、家康、僕に士五百人あり。白旄の指す所、水火と雖も避けず。寶とする所はこれのみ。と答へけるに、秀吉默然として、愧づる色ありけりとぞ。人に主たる者の心掛、東西相似て面白からずや。家康には尙これに類したる話あり。  
 或時、一役人闕けたりしかば、家康或老臣に、なにがしを代りにせんと思ひ、その人がらを尋ねしに、その人は、かねて臣

麾下

權柄の人  
追従

が許へ出入り致さねば、いかなる人物か知らざる由を答へければ、家康色を變じて、麾下の多き諸士の人がらを悉く知れと言はば、我が誤ならん。また汝諸士の善惡を必ずしも知るべき職にもあらぬに、問ひて知らぬをとがめば、我がひがごとたるべし。かの者は麾下に人多き中にも、日頃祿もなみに越えて、人に知られぬ程の身にもあらず。それに汝は第一、群臣の善惡を見聞き置きて、我が今の如く尋ぬる時は言聞かするを職とする者なり。何れにつけても知らぬと言ひて止むべき事にあらず。さ様な事とは知らず、重き職を言ひつけ置きしは、我が目がねちがひなり。すべて武道に志深き士は、家老または權柄の人に諂ひ追従せぬものなり。さ様なる



（入中の入）  
（月の中の月）

國家の元氣

中によき人あるべし。その埋れぬ様にと常に氣を附け心に掛けて尋ね求めてこそ、君の爲を思ふとは言ふものなれ。刀脇差、茶湯道具の類に名物埋れてありと聞きては、何とぞ取出して我に見せんと思ふべし。それはいか様の名物にても、國家の用にたゞず、なくても事かゝぬものなり。唯寶の中の寶といふは、人にまじしたるはなし。これは我常に口ぐせの様に言ふ事なれども、それをよその事にしてうかと聞く心か\*ら、只今の様なる返答をするなり。さて汝等が許へ出入する者ばかり立身する事と思はば、諸士の心だて悪しくなりて、權家にこび諂ふをよしとせん。麾下の士恥を知り義を守るは、國家の元氣なり。それに諸士の心きたなくなりて、恥を知

向後

らずなりなば、國家の元氣衰へて、やがて滅亡に至るべし。向後汝等茲に心を附けて、大切の事と覺悟せよ。と言ひけりとぞ。

五月の天橋

德富健次郎

（一）小説家。蘆花と號した。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。

（二）京都府（丹後國）與謝郡宮津町にある旅館の名。

聞流す

今宵は陰曆十月十四日の月夜である。  
荒木別莊を出た車は、月にほの白い山麓の一筋路を、海に沿うて小一里も北へ走る。霜を含んだ夜氣が面に當つて冷い。時々車夫は車を停めて、此所が涙が磯、彼所に高いのが籠燈の松など、と名所案内をする。さうか、と聞流しつゝ、心は早くも天橋の松原へ馳せる。

五月の天橋

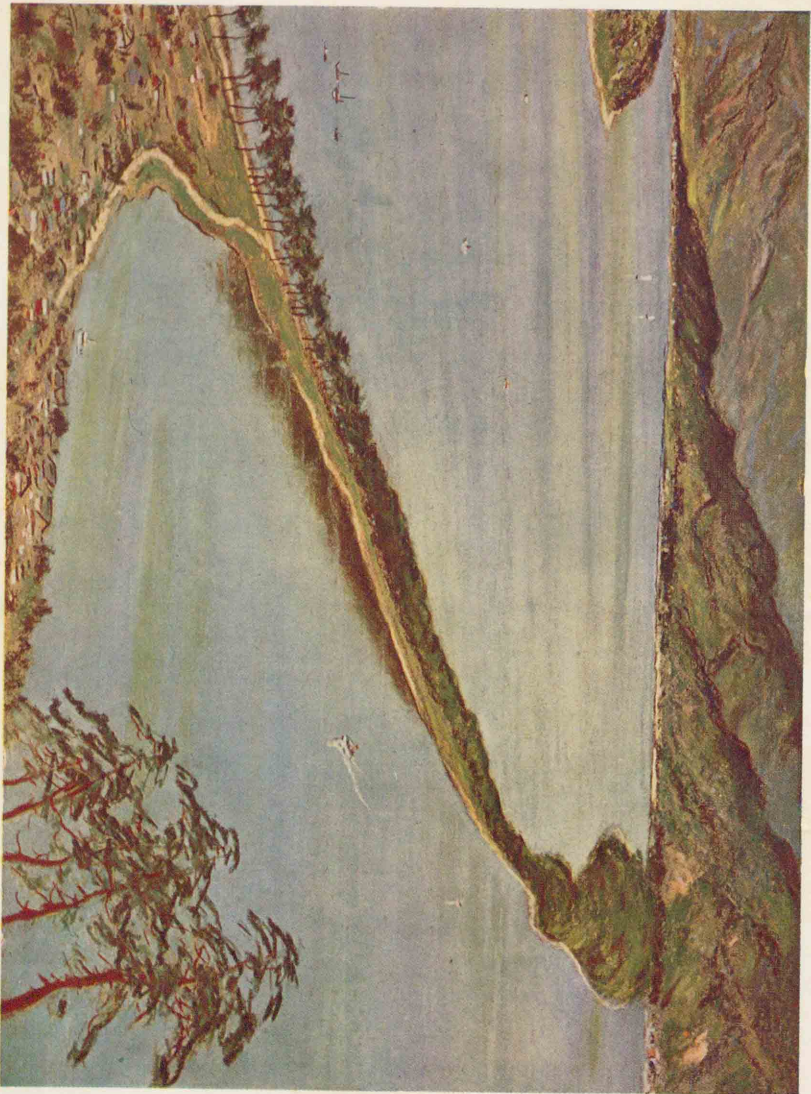
元



(一) 智恩寺ともいふ。禪宗。創建は詳かでない。現在のは寛永四年(二二〇八)僧別源の三再興にかゝる。

やがて車は文殊の町にはいつた。文殊寺の山門の前で止つた。この附近は松の樹蔭で、月はあつても墨の様に闇い。私には此所に車を待たせて置いて、天橋に渡るべく舟に乗つた。いはゆる切戸きりどの渡である。

ぎいーと艚さが響いて、舟は墨染の濃い松蔭から、白々とした月下の海に出た。海と言つても浅い洲の水である。何といふ好い月夜だらう。雲一つない空にのみ照るかと思ふと、水中にもまた天があつて、其所にも月は壁かべの様ように光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも水底の砂が分明に數へられる。此所は橋立、切戸の渡か。或は天の河を今渡つてゐるのではあるまいか。船頭よ、緩やかに舟を遣つてくれ。もつと



天の橋立 武内鶴之助筆



か細い



月光より松の影が多くなつた。何といふ明るい月だらう。仰

静かに遣つてくれ。しかし、いか程静かに舟を遣つても、彼岸は近い。するくくと舟はもう天橋の汀に著いてしまつた。

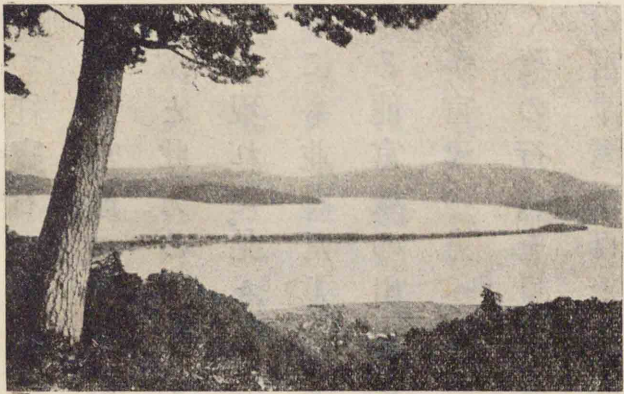
宮 舟から上つて踏む白砂は、もう天  
津 の橋立である。此所らは植ゑついで  
町 間もないと見え、松は稚木で、疎らで  
全 ある。月光に雪と輝く砂を踏んで、だ  
景 んだん奥へはいつて行くと、老いた  
蟲の哀な、か細い音が聞える。歩むに  
つれて松影は漸く深くなり、はては







ささめく



天の橋立

て行くのであつた。あとは唯のした様を與謝の海。照りまさる月の空と、靜かに相見て相抱き、一里の松原枝も鳴さぬ天の橋立の長い汀に沿うて、さぶり、またさぶりと、ささなみのささめくばかりである。汀からまた松原に戻つて、奥へ奥へと砂路を歩む。さく、くくと砂を踏む足音の絶間に、波のささめきが募うてくる。微に蟲の音が揺れる。松影は益、深くなつて、はては砂の上にと螢程に細かく疎らになつた。と見

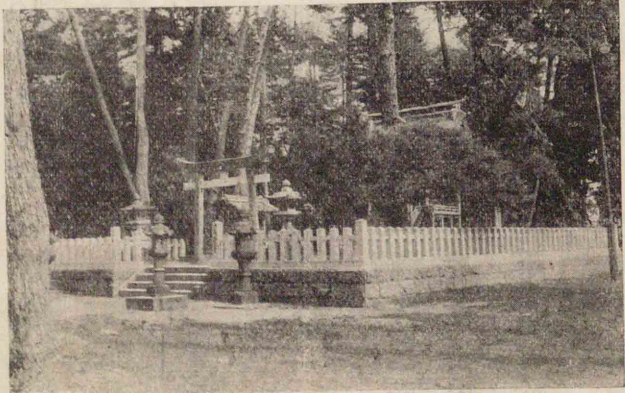
(一)天の橋立の松林中にある。

ると、此所にひつそりと鎮まります社がある。大方、橋立明神といふのであらう。松影を浴びたその宮に、人影もない、人聲もない、燈明一つ點つてゐない。二人は其所の松によりかゝつて、稍久しく立つた。

「歸るか。」

「え。」

この言葉の交されたのは、大分経つてからの事であつた。二人は松蔭から外に出て、砂路をぶらりと切戸の渡に來た。切戸の水はまるで銀河の様に美しい。汀に



橋立明神



恍惚

立つて向ふを見ると、眞黒な彼岸に唯一つ赤い灯が見える。文殊の渡守の小舎の灯である。おうい、く渡守を呼ぶ私の聲が、顫へて銀河を渡つて行く。二人は月の天橋の端に立つて、恍惚としてその灯影を眺めてゐた。

— 死の蔭に —

(一) 教育家。岐阜縣の人。明治十七年生。

(二) 禪僧。晩年曹洞宗の管長となつた。明治十二年寂。

沙彌

〇六 鐘の音

奥田正造

一日、奕堂和尚は殷々と響く曉鐘に心耳を澄し、禪定から立つて侍僧を召し、鐘撞く者が誰であるかを見させた。侍僧はそれが新參の一少沙彌である事を歸り報じた。そこで奕堂和尚はこれを膝下に招いて、

「今曉の鐘はいかなる心持で撞いたか。」

と尋ねられた。沙彌は

「別にこれといふ心持もなく、唯鐘を撞いたばかりで御座います。」

と答へたので、

「いや、さうではあるまい。何か心に思つてゐたであらう。鐘撞かばかくこそ、誠に尊い響であつたぞ。」

と言はれて、

「別にこれといふ心得も御座いませませんが、唯國許の師匠が、鐘撞かば鐘を佛と心得て、それに副ふだけの慎を忘れてはならぬと、常々戒めて下された事を思ひ浮べて、鐘を佛と敬ひ、禮拜しつゝ撞いたばかりで御座います。」



と答へた。奕堂和尚はしみじみとその心掛を賞し、  
「終生萬事に處して、今朝の心を忘るなよ。」



(一) 禪僧。號は大  
休。明治二十  
四年。曹洞宗の  
管長となつた。  
大正四年。東  
芝区。松原寺  
で寂した。八  
十二歳。

と戒められた。この少沙彌こそは、後  
森田悟由大禪師である。朝毎に  
夕毎に慣れて撞く鐘の一韻にさへ、  
か程まで敬虔の念を籠めた古人の  
心づかひはいかにも貴い。

通天の鼎洲和尚が、或日山門内で松の落葉を一つ一つ手  
で拾つてをられた。これを見た侍者某が、

「お手づから一つ一つお拾ひになるにも及びませぬ。どう

せ只今掃きます故。」

と聲を掛けた。鼎洲はつくづく侍者の顔を見て、

「今の言葉は修行する人の心掛ではあるまい。どうせなど  
と後をあてにする様ではいかぬ。一つ拾へば一つだけ綺  
麗になるのぢや。」

と戒められた。掃除、言換へれば、清淨は實にこの心でなけれ  
ばならぬ。はうきを持つた時にのみ掃除があるのではない。  
一塵の心にとまつた時、その一塵を取除けて常に清淨にす  
る所に、心頭の掃除がある。

雲門大師が門前で菜を洗つてゐた時、思はずその一葉を

清淨  
(帯)  
心頭



取流し、非常に驚いてこれを追ひかけ、苦心の末やう／＼拾ひ上げた。これを見た庄屋某が、

「菜の一葉くらゐにそれ程まで苦勞なさるのは、どういふわけで御座いますか。」

と尋ねた。大師は

「一莖の大なるも、一葉の小なるも、均しくこれ天與であつて、人を養はんが爲の物である。小なればとて棄てて顧ないのは、天恩を忘れ、人道に背く所以ではないか。百粒の米は一粒より生じ、一滴の水はよく長江の大をなす。」

と教へられた。この大精神に取りあつかはれる一粒一葉こそ、眞に道を修め人の生命を養ふに足りる尊い心身の糧と

言ふべきである。

—茶味—

(一) 倫理學者。國學院大學教授。埼玉縣の人。明治十五年生。

(二) 東京市の西郊。代々幡町代々木に鎮座。祭神は明神。皇太后。昭憲皇太后。

七 さわやかな心 その一

河野省三

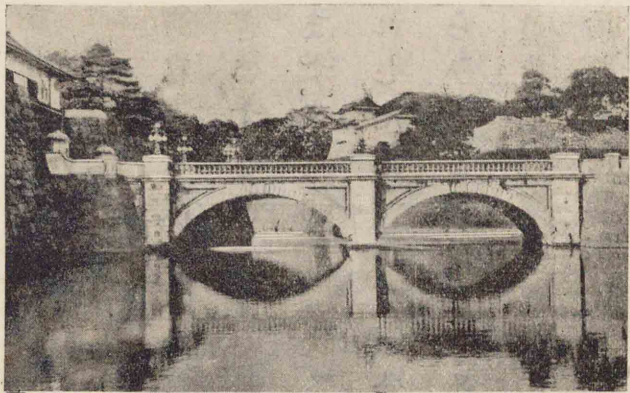
私どもは、晴れた日に東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴れ晴れした雅やかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひらひらと翻つてゐるのを見ますと、其所に活動的な生き生きとした氣分が起つてくるのであります。或はまたかの明治神宮に參拜致しまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居を潜り、清淨な參道を吸ひこまれる様に進んで、清い水で手を洗



つて御社殿前に参りますと、おのづからすがすがしい尊い

氣分に包まれて來ますし、更にまた松の緑の滴るお濠の前に立つて、我が皇室の御隆盛を思ひますと、何とも言へぬ神聖な氣分が湧起つてくるのであります。

これ等の神々しくすがすがしく、晴れ／＼しい心持こそ、實に我々日本人が、遠い／＼昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私



宮城正門

心の姿  
純眞な心

どもの祖先が育て上げて來た純眞な心は、全く我が國民性

の本質でありまして、いはゆる大和魂の眞髓であります。かかるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち満ちた心が、即ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、  
朝日のごとくさわやかに  
たまたまほしきは心なりけり。

とお詠みあそばされてありますが、このさわやかな心こそ、取りも直さず、斯様な純にして直なる氣分に外ならないのであります。私どもが、この世に於て毎日々々の生活を營む



屈託

に當りましても、最も大切な氣分であり、且價值のある態度は、誠にこのさわやかな心であります。このさわやかな心は、晴れ々しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、また妄りに他を排斥しない、穩やかな心であります。この心からして、かたよりのない、さわやかな氣分を味はふ事が出来るのであります。

天真爛漫

さわやかな心は、明快な、裏表のない心持であります。世の中では、濫味のある生きくとした生活が最も望ましいのであります。偽らない、正直な、天真爛漫な態度が、最も力強い生活であります。宗教の生命もまた此所にあると信じま

有意義

すが、天真爛漫は即ちさわやかな心の本體であります。さわやかな心は、かく清らかで濫味のある生きくとした心持でありまして、建設的に、有意義に、すべて物を生して行く所の積極的精神であります。いはゆる「朝日の豊榮昇る」氣分が、即ちこのさわやかな心の働であります。

根柢

私たち日本人は、かういふさわやかな心を根柢と致しまして、この尊い國體を築き上げ、この立派な國民道徳を形づくつて來たのであります。我が日本人の國民精神の現れである神道は、即ちこのさわやかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道に就いては古來色々の説がありますが、畢竟はこのさわやかな心、純眞な氣分に生きる所の日



信念

本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

八 さわやかな心 その二

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松坂(一)にあつて、當時の學界を風靡した本邦空前の大學者、本居宣長であります。この宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人間はば

あさひに匂ふ山ざくら花。

といふのがありますが、この大和心も、まさしくこのさわや

看破する

(一)三重縣飯南郡松坂町。

風靡する

(二)國學者。國學四大人の一。鈴屋と號した。享和元年(一八四一年)歿。年七十二。

たゝへる

ひたすら

かな心の姿をたゝへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であり、ます。力を極めて、この日本人の持つてゐる心の本來の姿に存する所の感情の麗しさ、眞心の尊さを説いた人であります。さうしてひたすらに、我が國家を愛する道を、力強く主張した人であります。

朝日に匂ふ山櫻花は、いかにも清らかであり、さうして單純に、さつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふ所のない、清い雅な姿であります。其所に私ども日本人としての心の特長が現れてゐるのであります。私たち日本人の祖先は、かういふ心持を明るく、淨く、直き心とも申しまし



て、道德の根柢となる心は此所にあると信じて居つたのであります。

一途に

かゝるさわやかな大和心を本質とする神道は、唯この雅な心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛したのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐる事は、明らかであります。神社は我が神道を形に生じた經典でありまして、かの鳥居と言ひ、鎮守の森と言ひ、氏神の御社と言ひ、何れも皆清淨簡素といふ事を尙んでゐます。其所にお参り致しますと、私たちの心は、おのづからすがすがしい、さわやかな氣分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流に、二千年の昔から鎮坐まします皇大神宮に詣

でますと、何人も西行法師と同じ様に、なにごとのおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝといふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感じられる尊い心こそ、即ち日本人の神に對するありのまゝの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも

浅みどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな。

といふのがありますが、この氣分を持つてゐるのが、大切な心掛であります。この御詠を拜誦しますと、いかにも清らかにさわやかな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。

拜誦する

大御心



因む

遙拜

(一)京都市伏見區、  
明治天皇、昭  
憲皇太后の御  
陵のある地。

ます。思へば、もう十數年の昔の事になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話を持つて居ります。それは明治天皇の御一年祭の行はれた時の事でした。或小さい田舎町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山(一)の方に向つて祭壇を設け、程よく隔つた所に並びました。老幼男女は、その町長を首めとして、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。その式に後れた町民たちは、何れも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りました。が、その中に年の頃は五十歳くらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて伏拜しましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束のしやうがを取

(生薑)

出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一步退いて一禮して立去つたのであります。これを目撃しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。

皆さん、私たち日本人の心の底には、かういふ飾氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゞへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活に移しまして、物を清らかにし、心をさわやかにして、偽らない力強い社會を築いて行きたいのであります。私はこのさわやかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活で眞面目な所に、一番よくその眞價を發揮するものがある



と信じます。

自修文

良寛さんと鵬齋先生

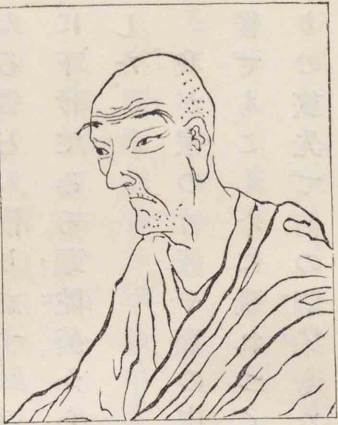
一

もう冬の季節に入らうとする頃でした。托鉢姿の良寛さんは、  
 出雲崎から東へ十里、三條といふ城下の外れの、とあるお寺の門  
 に休みました。  
 さうでなくてさへ、北國は冬のくるのが早い。雪でも催しさう  
 な寒い風が、曇つた空から吹きおろすと、僅かに残つてゐる梢の  
 葉が、引きちぎられた様に枝を離れて、はら／＼と舞落ちる。その  
 中に良寛さんは門の敷石に腰を掛けて、右の手に持つてゐる鐵  
 鉢を、心持前へさし出しました。中には、托鉢でもらつた米が、幾ら  
 かはいつてゐるのでした。

托鉢 僧尼の鉢を持つて米錢を乞ひあること。  
 (一)新潟縣(越後國)三島郡。北陸道の舊驛地。  
 (二)同縣南蒲原郡。稻垣氏の舊藩地。  
 とある。たゞ、あるといふに同じい。或。

鐵鉢 僧尼が托鉢する際施與物を受ける爲の器。つたが、瓦製だ。鐵製となつた。

(覗)



良寛

「ちゅ、／＼。」といふ聲がします。古びた門の屋根瓦の端に、二  
 三羽の雀が行儀よく並んで、一齊に頭を下に向けて、良寛さんの  
 鐵鉢をのぞきこんでゐるのでした。良寛さんはそれを見るときにつ  
 こり笑つて、また少し鐵鉢を持つて  
 ゐる手を前へ出しました。「ちゅ、／＼。」  
 といふ聲はだん／＼多くなりまし  
 た。瞬(また)く間に十羽、二十羽と數を増し  
 て、屋根瓦の端はすつかり満員にな  
 つてしまひました。

「ちゅ、／＼。」といふ取分け勇ましい聲と共に、二羽の雀が同時に  
 屋根をおりたと思ふと、ちよんと鐵鉢の縁に止りました。その瞬  
 間、ちらと良寛さんの顔をぬすみ見る様な風でしたが、すぐに安  
 心して、小さな首をさし延べて、お米をつゝき始めました。續いて



かしましく  
やかましく

頭陀袋  
修行の爲に食  
を乞ひつゝ歩  
く僧の用具を  
入れて頸にか  
ける袋

馴染  
なれ親しむこ  
と。なづくこ  
と。

三羽、四羽、五羽、やがて十羽程が、可なり大きな鐵鉢の縁にぎつしり立並んで、凄じい勢で食べるのでした。屋根の上にも、木の枝にも、それを羨む雀の聲がかしましく聞えました。やがてお腹のふくれた雀は、さも嬉しうに飛立つて、待つてゐる雀と入替ります。鉢の中のお米が少くなると、良寛さんは首に下げてる頭陀袋からつかみ出しては、お米を入れてやりました。

我が家の竹藪や森の中に住んで、毎朝軒端に来て餌を求める雀でも、こんなに馴れつくものではありません。まして通りがかりの旅先で、何の馴染もない雀が、手に持つてゐる鐵鉢の米を親しげにあさるなどといふ事は、良寛さんでなければない事です。田の實物はすつかり刈取られ、木の實も皆落盡して、餌の乏しさに悩んでゐた雀は、かうした思ひも寄らぬ良寛さんの御馳走

になつて、心ゆくまでお腹を満す事が出来たのを感謝でもする様に、「ち、〜」と言ひながら、三羽、五羽とだん〜に、鐵鉢の縁を去つて行きました。さうしてそれが全部去盡した時には、良寛さんの頭陀袋も、すつかり空になつてゐました。それをさも愉快さうにして、良寛さんが例のこ〜で、鐵鉢を袋に収めようとすると、

卒爾  
だしぬけ。ぶ  
しつけ。突然。

高野槇  
松杉科の常緑  
喬木。槇の一  
種で、普通の  
横よりも葉が  
細くて長い。

「卒爾ながらお尋ね申す。若しや御僧は出雲崎の良寛和尚殿では御座りませぬか。お人ちがひならば御免下されい。」と言ひ〜、門前に植ゑこんである高野槇の蔭から現れた一人、質素な身なりながら、旅装かひ〜しく、腰に大小を差し、左の手に菅笠を持つた五十歳餘りの男が、良寛さんの前に立つて、丁寧にお辭儀をしました。

良寛さんは別に驚く様子もなく立上つて、お辭儀を返しまし



拙僧 僧侶が自分の事を謙遜していふ稱

(一)名は長興。江戸の人。江戸時代末期の儒者。文政九年(一八二八年)歿。年七十三。

(二)二四六四—二四七七年  
(三)二四七八—二四八九年  
文化文政共に江戸文化の盛な時代であつた。

た。

「いかにも拙僧は良寛で御座るが、してお身様はどなたで御座るかな。」

旅人は嬉しさに、

「では、やつぱり和尚で御座つたか。先刻からあの雀の様子を拜見致すと、どうも餘人では出来ぬ事、和尚の外にはあるまいと存じました。かく申す拙者は、江戸の龜田鵬齋で御座る。」

それを聞くと、良寛さんはつかつかと傍へ寄つて、相手の顔をつくつく眺めながら、

「お、鵬齋先生。これは〜。」

お世辭一つ言ふ事を知らぬ良寛さんは、こんな場合にも、あいさつのしやうがなくて、唯「これは〜。」と言ふばかりでした。

龜田鵬齋先生と言へば、文化、文政の當時にあつては、江戸で一

その道にたける  
その道(書道)にすぐれてゐる。

偶然 思ひかけず。  
一見舊の如し  
一度あひ見て  
舊友の様に親しくなること

二と指を折られる程の學者で、門人も多く出入し、著述も澤山あつて、なか〜有名な人でした。殊に字が格別うまかつたので、随分遠方から招かれて、書きに出掛ける事がありました。今度の越後の旅も、やはりそれだつたのです。

書道に勝れた鵬齋先生は、自然その道にたけた良寛さんの名を慕うて、幸ひ越後路の旅、どうかして一度遇ひたいものだと思つてゐました。さうして圖らずも雀の紹介によつて、この二人は偶然顔を合せる事になつたのです。

昔の言葉に「一見舊の如し」と言ふのがあります。かうした道を樂しむ人たちは、自然その氣分がびつたりと合ひますから、一度遇ふと、もう十年も二十年も交際してゐる友だちの様に親しくなるものです。——良寛さんと鵬齋先生とは、もうすつかり仲よしになつてしまひました。



二

それから五六日後でした。鵬齋先生はやつぱり三條に滞在してゐましたが、其所の八幡宮のお祭に樹てる幟を書く事を頼まれましたので、或お寺の本堂を借受けて、大きな硯に澤山の墨を磨らせ、布を展べて、さてこれから筆を執らうとする所へ、破法衣に破草鞋、例の鐵鉢を持つてゐる良寛さんが訪ねて來ました。

「鵬齋はゐるかい。良寛ぢや。」

と言つた調子でした。書生が目を丸くして取次ぐと、先生も大いに喜んで、自身玄關へ出迎へました。

「やあ、良寛さん、先日は失禮致しました。今日はようこそ。先づ上られい。」

鵬齋先生は何と言つても儒者、平生から四角ばつた言葉を使つてゐるので、かうしたらうち解けた場合にも、やはりどこかに、そ

儒者  
孔子の學問を  
修めてゐるもの。

言葉尻  
言葉の末の方  
こゝでは「上  
られい」とい  
ふ語をさす。

こだはり  
かゝはること。

顔役  
土地の有力な  
口き。  
好奇云々  
ものずきに大  
きな眼をして  
見る。

の言葉尻がぬけません。

「いや、お前さんが幟を書くといふ事ぢやから、ちよつと見に來たんぢや。」



鵬 齋

「それは幸ぢや。これからやらうといふ所。和尚、半分書いて下さらぬか。」

先生なか／＼負けてはゐません。

「よからう、やつて見よう。」

良寛さんは一層こだはりがない。さら／＼と水の流れる様な應答です。相手が相手です、かうしたむづかしい事も、わけもなく相談がまとまつて、一對の幟を二人で書分ける事になりました。町の顔役と言はれる程の人々を始め、近所の人たちまでが幟を取圍んで、好奇の目をみはりました。

良寛さんと鵬齋先生（自修文）



事もなげに  
わけもなく。

書いてのける  
見事に書きお  
ほせる。  
しかつめらし  
いものくしい。  
まじめくさつ  
てゐる。

子供の心を何時までも失はない良寛さんは、また時々子供の  
する様な悪戯いたづらをしました。

「では書くよ。」

と、良寛さんは事もなげに筆を執ると、

「八まんさま。」

と、平假名交りに五文字すらくく書いてのけました。傍で見  
る人々は皆驚きました。「八幡宮」とか、「正八幡大菩薩びんぱん」とか、しかつ  
めらしい漢字を書くものとはかり思つてゐた。どこへ行つたつ  
て、假名がきの幟のぼりなどあるものではない。和尚氣でも違ひはせぬ  
か。それにしても、こんな幟の對たいをする事は、いかな鵬齋先生でも  
困るであらうと、見物の人々ははらくしてゐました。

ところが鵬齋先生、それを見るとにやりとしたまゝ、何の屈託くつたく  
もなささうに、墨たつぷりと含ませて、一方の幟に書いたのは

「五さいれい。」

の五文字でありました。言ふまでもなく「御祭禮」の意味ですが、良  
寛さんの「八」に對して「五」と出て、まんさまと假名で來たから、さい  
れいと同じく假名で應じたなどは、流石に大江戸で高名を馳せ  
た鵬齋先生だけあると言つて、人皆が感心しました。——雄辯——

### 九 知行合一

豊前(二)の山國谷(三)に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大含(三)  
は雲華と號し、文學を好み、書畫を善くし、廣く文人墨客と交  
り、別して頼山陽(四)とは無二の親友であつた。山陽は三十九の  
年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上  
人の手引であつた。山陽がその麗筆を揮つて、余が足跡殆ど

大江戸

江戸の繁華を  
ほめる心持を  
合めて大江戸  
と呼んだので  
ある。

(一) 東京大日本雄  
辯會講談社發  
行の月刊雜誌。

(二) 大分縣下毛郡  
書僧。豊後の  
人。生歿年不  
詳。

(四) 江戸時代の漢  
學者。名は襄  
通稱久太郎。  
安藝の人。天  
保三年(二四  
九二年)歿。年  
五十三。



(一)群馬縣の西部、上毛三山の奇蹟を稱せられる。白雲、金洞、金雞の三峰に分れ、白雲は最高で海抜は最も一トール。

(二)熊本縣八代郡。

海内に半ばす。弱冠にして東遊し、妙義山を得て以て無雙となす。今、馬溪百里、妙義の如きもの幾十峰なるを知らず、これを海内第一といふとも、或は誣ひざるなり。と言つて激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。

當時、肥後國八代(二)の光徳寺に易行院法海といふ、學徳共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫て雲華上人から得てゐた紹介を以て、遙々と法海師を尋ね行き、頼久太郎老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次をお願い申すと申し入れた。をりから机の前に端坐讀經してゐた老師は、やをら起つて、山陽に面會した。初對面のあいさつが濟むと、山

一瞥

陽は自分の書いた「楠公傳」の稿本を懐から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまふで、手に取らうともしなかつた。さうして

靜かに口を切つた、



頼頼「この頃うはさに聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふ者、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間唯の一度も歸省して親の安否を尋ね

ようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふ事だが、では御邊の事で御座つたか。この時法師の鋭い眼光は、山陽の面上を電の様に射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師



大それた事

は更に語を繼いで、『忠臣は必ず孝子の門に出づ。』とも『忠臣を  
求むるには必ず孝子の門に於てす。』とも言つて、これは古人  
の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を  
書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば  
果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會  
ひたうない。老師は言終ると起つて元の座に歸り、靜かに讀  
經する事初の如くであつた。

程經てやつと頭を擧げた山陽は、冷い汗が首筋を傳うて  
流れるのに氣が附いたが、今は取著く島もない。老師の前に  
默禮して寺門を出た。

「流石に一宗の學頭偉い和尚だ。これが當時文名一世に鳴

る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭で  
あつた。

一部始終

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人はいかにも我  
が意を得たといふ様に、さうであつたか。それはよく言つて  
くれた。貴公は豫て『知行合一』といふ事を學んでゐるが、今こ  
そそれを實行すべき時である。と言つた。

山陽は覺えず立上つて、法海師は夏日の日、上人は冬日の  
日だ。と言ふや否や上人の許を辭し、早々行李をととのへ、翌  
日早朝に發足して、老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと  
急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、またこれを京都



(一) 佛教學者、文  
縣博士。岐阜  
三年歿。昭和

(二) 一七四七年。  
河天皇の御代。

(三) 頼義の長子。  
八幡太郎と稱

(四) 秋田縣仙北郡  
金澤町。今此  
所に柵址があ

(五) 義家の臣。權  
五郎と稱した。  
この時年十六

に迎へ、吉野や伊勢にお供して孝養を盡し、輿行けば吾もまた行き、輿止れば吾もまた止る」といふ、輿に侍する歌などに於て數々の美談を遺したのも、基づく所兩師の言を虚心に受入れた爲である。

(一) 南條文雄「修養錄」に據る

### 一〇 日本外史よりその一

#### 一 後三年の役

(二) 寛治元年九月、源義家自ら數萬騎を將ゐて金澤<sup>(四)</sup>を攻む。相模の人鎌倉の景政戦を挑みしに、敵射てその右目に中つ。景政箭を抜かずして、己を射し者を索め、終にこれを射殺せり。清原武衡險に據りて死闘し、多く我が兵を傷ひ、未だ下すこ

(六) 鎮守府將軍武  
則の子。姪家  
衛と戦ひて敗  
れて殺された。

(一) 頼義の第三子  
騎射をよくし、  
また音楽を好  
み、笙を豊原  
時元<sup>(七)</sup>に學び、  
治極めた。大  
治二年<sup>(八)</sup>歿。  
七十七年<sup>(九)</sup>歿。

(二) 源義朝の第三  
子。正治元年  
歿。八十五年<sup>(一〇)</sup>  
歿。年五十三。

(三) 義朝の第九子  
文治五年<sup>(一一)</sup>  
歿。年三十一。

(四) 京都府愛宕郡  
鞍馬村。京都  
市の北十二キ  
ロメートル

と能はず。  
義家の弟義光<sup>(一)</sup>、新羅三郎と稱す。亦勇智ありて技能多し。この時右兵衛尉となりて京師にあり、兄の軍利あらずと聞き、奏して赴き援けんと請ふ。許されず。遂に官を捨ててこれに赴く。義家喜び泣いて曰く、「吾汝を見るは、猶先君に見ゆるが如し」と。乃ち輿に俱に進み攻む。柵固くして抜けず。義家會食に因りて勇怯の兩列を設け、以て戦士を勵ます。義光の從臣腰季方、日として勇列に列せざるはなかりき。  
二 牛若奥州に下る  
頼朝の弟牛若鞍馬寺<sup>(二)</sup>に居り、遮那王と稱す。年已に十一。嘗て諸家の系譜を見て、自らその先世を知り、悵恨すること久



精悍  
趨捷

(一)基衡の子。文治三年(一一八四七年)歿。

(二)京都三條の富豪。名を吉次信高といつた。



(筆達榮山小)王那遮

しうす。是に於て、晝は書を読み、夜は劍を學ぶ。人となり短小精悍にして、面白く齒出で、甚だ趨捷なり。衆僧に患苦せらる。師その髪を剃らん事を勸む。對へて曰く、「二兄僧となる。吾已にこれを恥づ。復傲ふべけんや」と。これを強ふれども竟に聽かず。時に藤原秀衡鎮守府將軍となる。牛若往きてこれによらんと欲す。<sup>(二)</sup>適鐵賈吉次といふ者あり、陸奥に往來す。その山に詣るに會ふ。牛若乃ち陰にこれに語るに情を以てす。吉次曰く、「事甚だ易し。然れども子を取りて去らば、恐らくは

(一)滋賀縣蒲生郡冠を加ふ

(二)和田備後守範長の子。生歿年不詳。  
(三)北條氏討滅の亂。  
(四)第九十六代。  
(五)京都府相樂郡にある山。  
(六)論語にある語。

僧徒の怒に遭はん」と。牛若笑ひて曰く、「彼の輩我に苦しむ。我が去るはその欲する所のみ」と。是に於て與に偕に東し、鏡驛<sup>(一)</sup>に至り自ら冠を加へ、名づけて義經といひ、九郎と稱す。

一一 日本外史より その二

三 高德櫻樹に題す

兒島高德は備後三郎と稱す、和田備後守範長の子なり。元弘の亂、後醍醐帝の笠置に在すや、範長、高德赴き援けんと欲し、笠置陥り楠氏敗れたりと聞き、乃ち止む。已にして帝の西遷し給ふを聞き、高德その衆に謂ひて曰く、「吾聞く、志士仁人は身を殺して以て仁を爲す事あり。義を見てせざるは勇な



(一)兵庫縣(播磨國)と岡山縣(備前國)との境にある峠。

(二)岡山縣(美作國)英田郡。

(三)支那の越の王、吳王の夫差と戦ひ、一たび敗れて降り、後遂に夫差を滅して仇を復した。

(四)勾踐の忠臣。

きなり。』と。蓋ぞ要して駕を奪ひ、以て義を擧げざる。』と。衆奮つてこれに従ふ。舟坂山に伏して待つ。久しうして至らず。人をしてこれを候はしめしに、曰く、「駕、山陰道に向ふ。』と。乃ち間道より杉坂に至れば、則ち已に過ぎ給へり。衆乃ち散じ去る。高德悵恨して去る能はず。乃ち服を變じ、駕に尾して行くこと數日、一たび帝に見えて申す所あらんと欲し、而して間を得ず。是に於て、夜、帝館に入り、櫻樹を白くしこれに書して曰く、「天、勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡なきにしもあらず。』と。且日、護兵聚りて視れども、讀む能はざるなり。乃ちこれを奏す。帝これを熟視し、欣然として、心に王に勤むる者あるを知り給へり。

(一)一九九三年。  
(二)源義家の後、始祖義重は上野(群馬縣)の新田に居つたのでそれを氏とした。延元三年(一九九三年)歿。三十八。

(三)神奈川縣(相模國)鎌倉郡。

四 義貞鎌倉を攻む

元弘三年、新田義貞選兵二萬を以み、夜に乗じて鎌倉を攻む。敵の大兵海岸に據りて柵を樹て、兵艦その南に列し、以て



村崎(白石邦彦筆)

傍射に備へり。義貞馬を下り、冑を免ぎ海に向ひて拜して曰く、「天子逆臣の遷され給ふ所となり

て、西海にいます。臣義貞坐視するに忍びず、兵を提げて賊を討つ。伏して願はくは海神臣が忠義を嘉し、潮を退けて以て道を開き給はん事を。』と。因つて佩ぶる所の金装の刀を釋い



鏖戦

て、これを海中に投ず。曉のころほひ潮大いに退き、兵艦皆漂ひ去る。義貞大いに喜び、衆を麾いて進む。諸軍これに従ひ、直ちに府中に入り、風に乗じて火を縦つ。烟燄天にみなぎる。義貞兵を縦つて鏖戦し、高時の舉族遂に誅に伏す。

一二 日本外史よりその三

五 川中島の戦

(一)長野縣高井、水内、更級、埴科の四郡にわたり、千曲川、犀川の交會する地方の稱。  
(二)信虎の長子。薙髪して信玄と號した。天正三年(一五七五)歿。年五十三。  
(三)上杉氏の宿將。長尾爲景及び謙信に仕へて殊功があつた。

川中島の戦に、武田信玄勝に乗じて進む。越後の將宇佐美定行等手兵を以る、横撃してこれを破り、これを河に陥る。信玄數十騎と走る。一騎あり、白布を以て面を包み、大刀を抜き來り呼びて曰く、「信玄いづくにかある」と。信玄馬を躍らして

(一)原大隅守。武田氏の部將。  
(二)上杉謙信。名は輝虎。長尾爲景の第三子。天正六年(一五七八)歿。年四十九。  
(三)今川義元。氏親の第三子。父の封を襲いで駿河の國守となつた。永祿三年(一五六一)桶狭間に於て織田信長に滅された。  
(四)今の静岡縣岡市。  
(五)天文二十年(一五五一)。  
(六)安倍川の河原。安倍川は駿河國の西部を流れて駿河灣に注ぐ。

河を渡り、將に逃れんとす。騎もまた河を渡り、罵りて曰く、「豎子此所にありしか」と。刀を擧げてこれを撃つ。信玄刀を抜くに暇あらず、持てる所の軍扇を以てこれを禦ぐ。扇折る。また撃ちてその肩を斬る。甲斐の從士これを救はんと欲すれども、水急にして近づく可からず。隊將原大隅、槍もてその騎を刺す。中らず、槍を擧げてこれを打つ。馬首に中る。馬驚き、跳つて湍中に入り、信玄纒かに免る。後、越後の捕虜を獲たるに、言ふ、「前の騎は乃ち謙信なり」と。

六 將門將を出す

東照公幼にして今川氏に質となり、駿府にあり。五月五日、出でて安倍河原に遊び、兒童の石戦を觀る。一群は百五十人、



一群はこれに倍す。觀る者争うてその衆き者に就く。公、年甫めて十歳、僕の背にあり。命じてその寡き者に就かしむ。僕怪しみて故を問ふ。公曰く、「衆き者は勢を恃んでその心一ならず。寡き者は懼れて力を専らにす。その勝つこと必せり」と。果してその言の如し。義元これを聞いて曰く、「いはゆる將門將を出すものなり」と。

〇一三 甲賀孫兵衛

大町桂月(一)

「やよ孫兵衛、近う寄せ。汝を男と見て頼みたき事あり。我が爲に弟なる式部を人知れず暗殺してくれよ」と、稻葉丹後守はその臣甲賀孫兵衛を呼びて命令しけり。

暗殺

(一) 文學者。名は芳衛。高知市大正十五年四月、十七

孫兵衛といふは、年僅かに十六歳なる少年なり。家臣も多かるべきに、他の者には命ぜられず、ひとり男と見られ、かゝる重大なる祕密をうち明けて大任を負はせられたる孫兵衛、年は若けれども確かなる男、膽力のある男、腕のある男なりし事は、問はずして明らかなり。

されど、主君の弟君を暗殺せよとは、餘りに意外なる命令なり。

「驚くは無理ならず。されど汝も知る如く、式部の驕心亂行、とても生して置くべきにあらず。現在血を分けたる弟なり。いかにもして人一人前の者にしてやりたしと、心を碎き言葉を盡して諫め、誠めたる事幾十度なるを知らず。さ



しれ者

れど理非を辨へぬしれ者、我が眞心こめたる訓戒を馬の耳に念佛と聞流して、募るは非道のふるまひ。狼や虎が人間の形をかりて來れるものか、兄を兄とも思はず、家臣を家臣とも思はず、これまで罪なき人を殺したる事、そも幾何なるを知らず。このまゝ生し置かばいかなる事をしてかすかもわからず。訓戒すべき術既に盡きたり。この上は一思ひに命を絶ちてやる事、却つて弟の爲なり、また天下の爲なり。頼むぞ孫兵衛、我が心の切なさを推量して、この大任を果してくれよ。

男

丹後の心中、一應は尤もなり。されども孫兵衛は思慮ある

諫言

「御言葉一々御尤もに存じます。さりながら御弟を殺し給ひては、弟君の亂行にも劣らぬ亂行になり申すべし。殺し給はずとも懲しめ給ふ途なきにあらず。今一應御熟考あらせ給へ。」

小賢し

一旦言出しては、後へは引かぬ氣象の丹後守、孫兵衛の諫言を聞いてくわつと怒れり。  
「よし、汝に頼むまじ。何やかやと小賢しう理窟陳べたてて我が命を拒むは、よく、卑怯なる男。その様なる男に弟を斬る事は出來まじ。すぐ出て行け。他の卑怯ならぬ者に頼むぞ。」  
この言を聞きたる孫兵衛の心のうちやいかなりけん。十



六年の歲月は短けれど、膽を鍊り、武を磨きて、あつばれ一人前の武士たるに恥ぢぬ男一匹。人を殺す能はざる卑怯者とさげすまれては、今日より直ちに武士の一分が立たぬなり。君命に従はんか、君をして弟を殺すの罪名を負はしめん。君命に従はざらんか、君を捨て、刀を捨て、父祖の家命を辱めざるを得ず。世にも苦しき命令を受けたるものかな。孫兵衛は煩悶する事一方ならざりしが、忽ち決心せり。

檢視

「この上は致方なし。謹んで仰を奉じまつらん。唯臣が卑怯ならぬを證すべければ、檢視の人一人添へて賜はれ。」  
さらばとばかり、檢視役と共に出でて行く孫兵衛、今ひと目と君の館を顧て、ほろりとこぼす一滴の涙は、知らず何を

か語る。

無法極る式部の君、兄の使と聞きてはや癢にさはれり。眼を瞋らし、面に朱をそゞげる様、悪鬼羅刹もかくやと思はる。その手、刀の柄を握りて一喝す。

「つか〜と近寄らば斬殺すぞ。」

されど孫兵衛はびくともせざるなり。

「身は殺さるとも、君の仰は傳へざるを得ず。遠くでははつきり致さず。赦させ給へ。」

刀を抜いて座に置き、ゐざり行きつゝ直ちに式部の膝の前まで進み、臆する色なく徐に式部の罪を數へぬ。數へ畢つて曰く



觀念

「主君の命なり、御觀念あれ。」

躍り上りて式部を組伏せ、一もがきももがかしめずに押へつけたるは、神の業か、鬼の業か。檢使驚歎し、式部あつとばかりにて一言もなし。

孫兵衛脇差を抜いて式部の胸に向け、檢使を顧て曰く、

「我が卑怯ならざるは、既に見届け給へるなるべし。早速この旨を主君に傳へられよ。」

檢使は去りぬ。

孫兵衛脇差を投捨て、式部を抱起し、一間許後じさりして平伏す。

「御赦しあれ。君命やみ難く、無禮仕りぬ。今は既に君命を果

萬死を誓ふ

しつれば、御身の爲に謀らひ申さん。御身今はこの土地に留り給ふべからず。しばし他國に落延びて命を全うし給へ。臣萬死を誓つて擁護しまつらん。」

流石に暴悪なる式部も、孫兵衛の膽勇と眞心とは感歎せざるを得ず、おとなしく孫兵衛と共に落行きけり。

かくて孫兵衛は君命を全うし、君に罪名を負はしめず、また武をも辱めざりけるなり。

後數年式部旅路の空に病死しければ、孫兵衛呼還されて、重く用ひられけりとぞ。

— 男の中の男 —

旅路の空



(一) 歌人。名は繁宮崎縣の人。昭和三年、年四十四。

あらはになる

(橡) (山毛櫸)

一四 冬木立

若<sup>(一)</sup>山牧水

私はよく山歩きをする。山歩きをするのには、秋から冬に移る頃の、ちやうど紅葉も過ぎて、漸くあたりがあらはになるうとする落葉の頃がよい。そして草鞋ばきの足元からは、とちはとち、ぶなはぶな、色々の木がそれと、その匂を放つてでもゐるかの様な、眞新しい落葉のからく、に乾いたのを踏んで通るのが、いかにも心地よい。黄色な色も鮮かに散積つた落葉の中に、岩の鋭い頭が見え、其所には苔が眞白く乾いてゐる。時々大きな木の根から、長い尾を曳いて山鳥が舞立つ。その姿が何時までも見えてゐる様に、あらはに明る

い落葉の山。

それも餘り低い山では面白くない。暖國の海拔の低い山では、落葉の色がきたない。それは永い間枝にしがみついてゐて、そして愈、落ちる時になると、もう薄黒く破れ、かじかんでゐるからである。一霜で染り、二霜、三霜目にはもうはらはらと散つてしまふのは、どうしても寒國の高山の木の葉である。随つて私は高山の多い甲州、信州、上州などへよく出掛けて行く。

或年の十月末であつた、利根川の上流に當る上州の片品川の水源林となつてゐる深い山に入つて、山中にある沼にますを飼つてゐる番人の小屋に一晚泊してもらひ、翌日其

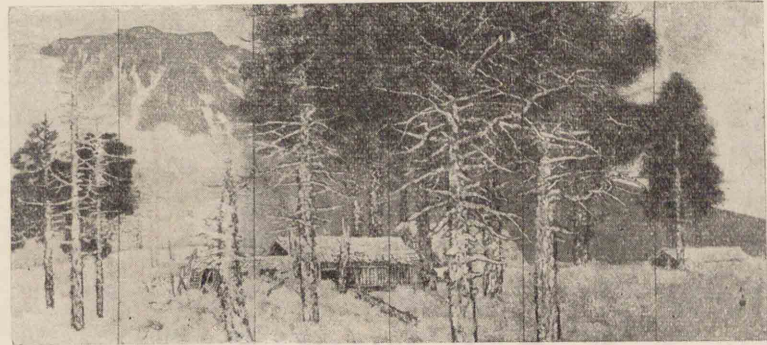
かじかむ

(罇)





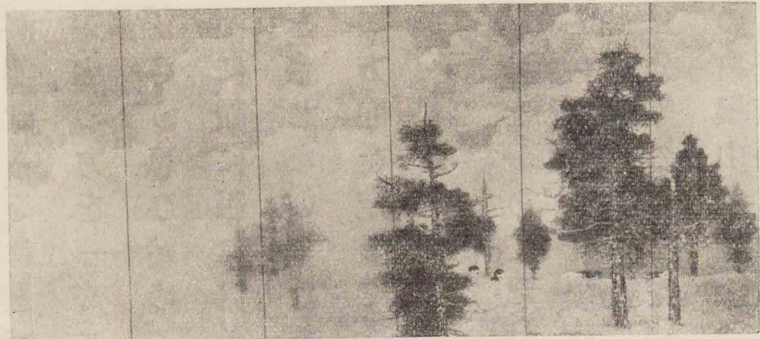




(筆岳敬井西) 原 が 場 戦

芽であつた。開いて葉となるべき芽であつた。  
 一枚の葉も残つてゐないとは言ふものの、ほんの一二日前に散つてしまつたと言ふばかりの所であつた。そして散つてしまつたと見ると、もう一日か二日の間に、次の年の芽がこの様に枝ぢゆうに萌えて出てゐるのである。私は全く不思議な物を見出した様な驚を覺えた。

これ等高山の寒い所の樹木は、かう



(筆岳敬井西) 原 が 場 戦

して遽しい生活の營を續けてゐるのである。暫くもぼんやりしてはゐない。少しの時間をも惜しんで、自分を伸して行かうとしてゐるのである。霜がおりて葉が染る、落ちる。間もなく雪がやつてくる。それから永い間雪の中に埋つてゐる。その間こそ、彼等が自分をどうともする事の出来ぬ永い休息の時である。年を越えて、恐らく五月か六月の頃まで、さうして靜かにしてゐなければならぬのであらう。さて雪



静寂

(一)中禪寺別所の  
邊から湯元の  
入口までおよ  
そ一二キロメ  
ートルにわた  
る平原

が解ける。それとばかりに、去年の秋からこらへてゐたその  
芽生の力を、一齊に解きほぐすのである。  
さう思ひ始めると、私はその静寂を極めた冬枯の木立の  
間に、誠に眼に見えず耳に聞えぬ大きな力の動いてゐるの  
を感じないではゐられなかつた。大きな力が、どこもなし  
に、方向を定めて徐に動いて行つてゐるのを感じないでは  
ゐられなかつた。

峠をおりて、私は湯元温泉に一泊した。そして翌朝其所を  
立つて戦場が原の方へ出ようとして、不圖ふり返ると、昨日  
自分等の休んだ峠から幾分南寄りに聳えてゐる尾根續き  
の白根山には、ゆふべ一夜のうちに、はやしらと雪の來

てゐるのを見た。

X 一五 造化のたくみ

天地相像の神様ヨロコボシの國で立ちつゝれた

(一) 土井 晩 翠

あゝ、うるはしきあめ地の  
たくみをいかにたゝへまし。  
月日めぐりて年逝きて、  
かはるいくその景色ぞや。

春のあゆみの著く所、  
地に花かをり草いろひ、  
春のいぶきの行く所、  
空に蝶まひ鳥うたふ。



(筆 雲 耕 田 山) 光 春

(一)詩人、英文學  
者。第二高等  
學校教授名は  
林吉仙臺市  
年の生。明治  
四年

いくそ

いろふ

いぶき

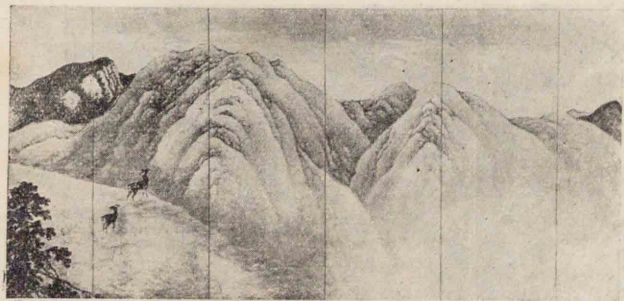


清きは夏のゆふ河原、  
すゞしき眺見よやとて、  
空に月照り風そよぎ、  
地に露結び水ながる。

しぐれも雲も時めきて、  
その季節にまさりし様

秋のゆふべの色よはた、  
たには紅葉のあやにしき、  
峰は友よぶ鹿のこゑ。

冬はあしたのあけの色、  
色なき空に色ありて、



(筆 畝 秀 上 池) 月 夕

雪のこずゑに梅かをり、  
梅の梢に雪かゝる。

あゝ、いつくしきあめ地の  
たくみをいかに讃へまし。

おなじひと日の空合も、  
うつるいくその眺ぞや。

— 晩翠詩集 —

一六 多摩御陵に詣でて

僕たちを取つてとりわけ懐かしい響のこもる大正の  
御代を知ろしめされた帝の大御墓、多摩の御陵に参拜  
した後のすがくしい氣持を、君にもお分ちしたいと

(一) 東京府南多摩  
郡横山村。



(一)十二月二十五日。

(二)東京府南多摩郡淺川村。東京の新宿から四二キロメートル。

思ひます。實際僕たちには、大正の御世が慕はしい。それは唯僕たちが大正に生れたからといふだけでなく、この御代が明治大帝の御遺業を完成された榮譽ある時代であつたにも拘らず、僅か十五年で終つてしまつた物足りなさからでもありませう。

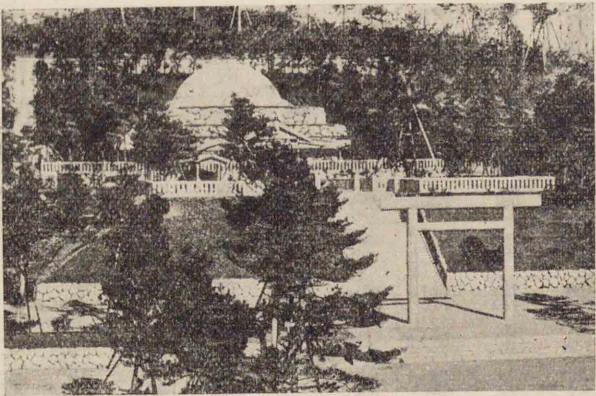
僕は特に大正天皇祭の當日を選んで行きました。この日がやはり忘れ難い追憶と懐かしい感情とを結び附けるのに最もふさはしいと思はれたからです。中央線淺川驛に著いたのは午前九時でした。この頃にはもう人の乗降りが相當あつて、田舎驛らしくない賑やかさ

でした。驛を出て直面する一本の道路は甲州街道です。

正面遙か彼方の丘に赤い屋根の洋館が一棟、目を驚かす様に立つておりました。これは林野局(一)と林業試験場とであるといふ事です。しかし、この丘が十々里山といふ古戰場である事を知つて、感興を引かれました。そして左手の方には甲州の山々がどこか冬らしい装をして連な

感興を引く

(一)帝室林野局横山出張所。  
(二)林野局に併置されてある。  
(三)八王子城主の北條氏照と徳川方との戦



多摩御陵

つておます。僕は電車を避けて、甲州街道を東へ歩きま



した。この道程約十一二町。すると左方に展開する十二三間もあらうかと思はれる大きな道がありました。これが參道です。流石に土の面も新しく、敷詰めた小石の色もさえて、神域に入る思がしました。この道を一町許行くと、白塗の橋が架つてゐます。淺川の清流が音立てて流れるのを見おろして行く心地はさわやかでした。そしてこのあたりは廣闊な眺望を恣にし、右に左に、行く手に山また山の遠景を配した瀟洒たる別天地です。これから數町、稍上り氣味の小石路を踏んで行くのです。兩側の立木の杉もみなど、常磐木の色濃く林立する間を抜けて行きます。これ等の木々の根元には、間々斑

(牙)

に雪の跡さへあつて、一層清らかさを増してゐました。御陵墓はこの路の窮る所、龍谷戸と稱する海拔二百十八メートルの高地に造營されてあります。僕は御手洗の水に心の隅々まで清めて、靜かに禮拜しました。誰も彼も咳一つしないので、つゝましく伏拜んでゐます。日本人だけが知る感激に胸を震はせながら、僕もまた恭しく拜みまつりました。眞に勿體ないもの言ひ様ですが、僕は大正天皇の御風格を、神格化して考へるといふよりも、寧ろ僕たち人間に近い御方であらせられた様に思はれてならないのです。



神まつる我が白妙の袖のうへにかつ薄れ  
行くみあかしのかけ。

藝術的天分に恵まれさせられた天皇のこの御製を拜  
誦する時、尙更にその感を深くします。

御鴻業の輝かしさも、御聖徳の忝さも、人々の記憶には  
常に新たによみがへるでせうけれども、今眼の前に仰  
ぎ見る御陵の面影は、全く「神嚴」の一語に盡きて居りま  
す。をりから傍に半白の老人が一人たゞずんでゐまし  
たが、ふり返り際に、その長い睫毛が涙に光つてゐるの  
が見えて、覺えず胸を打たれました。  
一、ハレの面影を、澄ました空の下に見えぬ見渡眼、冬の様子も大正天皇  
からりと晴れた空の下に満目蕭條たる冬の氣配も、何

満目蕭條

よすが

の御陵は、大正天皇の御陵墓らしく、あたりの山も木も、立  
ち盡す土の面も、すべては清澄な氣に満ちて、この帝の  
御一生を、ままに、ヤ、フに思はれるのでした。  
僕は何度でも此所に來て、一種言ふべからざる興奮に  
心をひきしめたいと思ひました。  
君にも一度をりを見て是非參拜される様、切に勧めま  
す。

一七 國家と祭祀 その一

國家といふ語はもと漢語で、國を家に譬へて言つたので  
ある。しかし、我が國では譬喩ではない。我が國は全く一つの



おほやけ

家で、その總本家即ち大宗家は皇室でいらせられる。我等日本民族の宗家が天照大神の御裔である皇室であつて、我等の家は皆その分家である。それ故、皇室をばおほやけといふ。おほやけは大家で、大きな家の義である。おほやけに對しては、我等の家は皆こやけ(小家)である。公をおほやけと訓ずるのも、公は私に對して、もと皇室の事を言つたからである。歴史から見ると、日本の氏姓には皇別、神別、蕃別と言つて三通りあるので、蕃別と言ふのは、もと外國から渡つて來た氏族である。それ故、今日の日本國民の中には、純粹な日本民族でないものも混つてゐたのである。しかし、それ等も皆多數の日本民族に化せられて、全く一つになつて、皇室を大家と仰

こやけ

みやつこ

(贏)

ぎ奉つて、臣民は皆みやつこと稱したのである。みやつこは御家つ子の義で、「御家の子」と言ふ事である。後世の武士の家で家の子と言つたのは、宗家の分れの分家の者を言つたのであるが、それと同じ様に、日本臣民はすべて、皇室即ち大家の「家の子」であるのである。こゝに日本の特殊な國體がある。外國の帝王は人民の中から起つたのである。多くは武力を以て王冠をかち得たのであるが、中には徳望によつてその位に推された者もある。何れにしても人民の中から出たのである。もと人民と同格な人である。日本ではさうでない。神代の昔、天照大神の神敕のまに、皇孫がこの國の主とお下りになつて、それで日本の國が出來たのである。皇祖皇宗

日本の君主が元ニ出來キ臣下  
かアトカラ出來シ



我が皇室  
我が祖先が國ヲ御立テ  
ツキムルシテトホイヒ

(一) 古代天子即位  
のたび毎に伊  
勢の神宮に奉仕  
せしめられた  
未婚の内親王  
または女王  
いつきのみこ

國ヲ肇ムルコト宏遠ニと仰せられた通り、我が皇室の御祖  
先が、この日本の國をお建てになつたのである。それ故、皇室  
は上にあり、人民は下にあつて、上下の別、君臣の分が最初か  
ら定まつてゐる。さうして皇室即ち大家が、すべての人民即  
ち小家をお統べになり、お率ゐになつて、その國を知らしめ  
されるのである。大家は即ち國家、小家は即ち臣民の家、臣民  
は皆御家の子で、こゝに渾然たる日本の國家があるのではあ  
る。

この大家に於て祖宗の神を祭らせられる事は、我々小家  
に於て祖先を祭ると同じである。伊勢の皇大神宮は歴代の  
御崇敬が最も厚く、昔は御代毎に皇女御一方が齋宮として

(一) 故朝彦親王の  
第五王子。明  
治八年御誕生

恆例

奉仕されたのであつた。後醍醐天皇の御代からこの事は絶  
えたが、今では皇族一方が天皇の御手代として、祭主として  
奉仕される。今の神宮の祭主は久邇宮多嘉王殿下である。

凡そ國家に大事件があれば必ず神宮に奏せられ、天皇は  
必ず親ら御參拜あらせられる。明治天皇は御治世中、四回ま  
でも參拜あらせられたが、三十七八年戰役の後の行幸は、一  
層御鄭重の儀であつたと承つてゐる。毎年一月四日の政事  
始には、内務大臣が御前に進んで、神宮が御無事である事を  
先づ奏するのが恆例になつてゐる。

皇祖は大宗家即ち大家の御祖先であるから、我等御家つ  
子の崇敬すべき大祖先である。それ故、古來の國民も神宮に



(一)歌僧。俗名佐藤義清。圓位と號した。久元年(一八七〇年)寂。年八十三。

對し奉つては、常に崇敬し來つた。西行法師が「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼる」と歌つたのも、芭蕉が

何の木の花とも知らず匂かな。

何の木、花、匂、知らず、匂、かな。神、殿、や、り、こ、う、く、し、い。何、ト、モ、イ、ハ、レ、ナ、イ、ア、ル、神、々、シ、イ。

と言つたのも、此所に詣でて、一種言ふに言はれぬ靈感に打たれたのである。一生に一度は伊勢參をしなければならぬと、やがて家長となるべき昔の男子は皆心掛けてゐたのである。この心は今も全國民に行渡つてゐる。家の神、郷土の神を尊敬する心を以て、大家の神、國家の神を尊敬するのである。

〇一八 國家と祭祀 その二

上古は祭政一致と言つて、祭祀は即ち政治であつた。政をまつりごとと言ふのはこれが爲である。暫く昔の祭祀の有様を想像せよ。すめらみこと天白三が山山、海、の、物、味の物、海の物さま山、海、の、物、味の物を供へて、祖先の神をお祭りになる。その儀式は嚴か厳、し、うで、その儀禮は恭しい。音楽が奏せられる。祝詞祝、詞が奏せられる。御家つ子は尊卑老幼の順序を以てその祭祀の庭にうづくまる。參集した一同は「明き淨き心」で皇祖の御靈に對し、現つ御神の御親祭に侍るのである。

その儀式の嚴かで、儀禮の恭しいのが即ち我が國の禮法の根源である。上下の別、老幼の序は明らかにこゝに實現さ



れる。人々は皆明き淨き心を以て神に誓つて、こゝに後世の語で言ふ忠も、孝も、友も、信も皆會得されるのである。かくして相睦び、相敬して、平和に幸福の生活を營む。これが即ち惟神の道で、我が國の不言實行の道德であり、さうしてそれがまた政治であつた。

後世になつては政治の事務が多端になつて、祭事と政治とは別になつた。しかし、その精神は今日まで傳はつてゐる。精神ばかりではない、天皇は今尙祭事を國家の祭祀としてお務めになるのである。國民もまた大家の祭事を國家の祭祀として崇め奉るのである。前に言つた一月四日の政事始も、祭政一致の旨を表してゐるが、各大祭日の宮中の御祭祀

(一) 宮内省式部職  
掌典部の長  
宮中祭典の事  
を掌る。

は、即ち國家の祭典である。各大祭には大抵天皇が親祭あそばされるが、御病氣その他小祭のをりには、掌典長が代つて奉祀する事もある。一般の官廳學校などは休日であるが、宮中では最もお忙しい日で、皇族を始め高官の人は、上古の世と同じくその祭祀の庭に參列するのである。大祭日を休暇日と思つて安逸に過してはならぬ。國家祭祀の意義ある日である事を忘れてはならぬ。祭政一致

農を本とした日本國及び國民の爲には、年の豊凶が重大な事件である。それ故、新嘗祭は最も重いお祭である。また伊勢神宮の爲には、別に神嘗祭も行はせられるのである。豊年の秋の村祭も、その感謝の意味に於ては、新嘗祭の小さい私

(二) 十一月二十三日  
(三) 十月十七日。



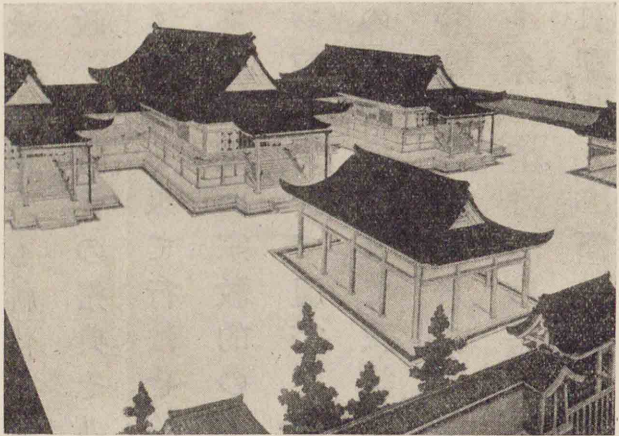
祭と言つてもよろしい。天皇は年々國民一般に代つてこの大祭を行はせ給ふので、<sup>要は</sup>親しく祖宗の神靈に向つて、國家の繁榮と臣民の幸福とを祈らせ給ふのである。この新嘗祭の一世一代御即位の禮と共に行はれるのが大嘗祭である。

(一)神饌を奉安してある所。

新嘗祭は十一月末の薄寒い頃、宮中賢所<sup>(一)</sup>に於ける夜をこめての御祭典である。御親祭のをりには、天皇の外一人も御殿の中に入る者はない。掌典の奉るくさくさの捧物を御身親ら捧げ給ひ、親しく神靈に告げ給ふのである。明治天皇の御親祭を拜し奉つた人の話に、御親祭が終つて御殿を出てさせ給ふ時には、玉顔に御汗の流れるのを拜し奉つたとい

古典

儀典



宮中三殿(神殿) 賢所 皇靈殿

ふ。森嚴なこの御祭祀、天皇は唯國家の爲、國民の爲とお務めになるのである。

天照大神が親ら新嘗祭をあそばした事が古典に載つてゐるのを見て、この祭典の開闢以來の儀典であつて、皇祖以來行はせられた事がわかる。歴代の天皇は即ち神代のまゝの祭祀を、そのまゝに相繼いで行はせられるのである。祖先の道を違へず履ませられる。祖先の道を違へず履ませられる。その庭に侍る事、今



(籌)

(一)「父母は我が家の神我が神とて、こゝろつくしていつけ人の子。」(玉矛百首)  
(二)本居宣長のこ

も昔の通りである。古風の樂の調べ、夜のお祭に焚くかゞり火など、何れも神代の昔を思はしめる。今日の祭典は即ち祭政一致時代の祭典そのまゝである。國家行政の一部分といふ精神を以て行はせ給ふのである。國民一般の爲の儀典であつて、狭い宗教的のものではない。祭政の實例、宮中に於て祖宗をお祭りになつて、大孝を申べさせ給ふのは、大家として我等に範を示させ給ふのである。小家たる臣民の家々に於てもまた伊勢の大麻を頂戴して、國家の神を祭り、且また我等の祖先の神を祭るのである。大家、小家共に、祖先から下つて悠久に子孫に續く家であるからである。  
ちゝはゝは我が家の神と本居大人の歌はれた通り、父母

をも神として仰ぐのが日本人の家庭である。まして親の親、遠つ親を尊崇するのは當然である。生きています親と、既に世を去られた親とは、等しくこれを尊崇するのである。現つ御神を尊崇すると同時に、祖宗の神をも尊崇するのである。宗教を誤解してゐる信者の中には、自己の信ずる神の外は禮拜する必要はないなどと思つてゐる者がある。これ等は既に自己の親を忘れてゐる者である。生きてゐる親は尊敬するが、死んだ親には敬禮せぬ、現つ御神は尊重するが、祖宗の神は尊重せぬといふのは、理窟に合はぬ事である。日本國民たる者は、自己の信ずる宗教の何たるに拘らず、よく祭祀の意義を解して、至尊の身を以て國民の爲に祖先



(一)國文學者、文  
市博士。福井  
十二年。癸、年昭  
六

崇敬の模範を示し給ひ、また國利民福を祈らせ給ふ大御業  
に感謝しなければならぬ。

**自修文**

我々日本國と云ふは、  
のほかにやうな事感で、  
しなげぬは、けなしい事とめてある。

禮儀作法

芳賀 矢一

人の交際に禮儀作法のあるのは、上下の別を明らかにし、社會の秩序を保ち、人類の幸福を増す爲である。禽獸には禮儀作法はない。一片の肉を争つては互にかみ合ふのである。人類には、野蠻人間にも多少の禮儀作法のない事はなく、文明に進むに随つて、それが次第に發達し、整頓する。東洋と西洋と、日本と諸外國と、日常の禮儀や作法にはその形式の上に多少の相違はある。しかし、その根本の精神は同一である。人は單に規則を守り、法律に背かぬといふだけではないかぬ。よく世間の禮儀作法を守らなければならぬ。禮儀を知らぬ者は無禮者と言はれ、作法に熟しない者は

無作法者と卑しめられる。人にして禮なければ禽獸に如かずといふ語さへある。法も則も日本の古語ではノリである。儀も典も同じくノリである。法則を守るばかりでなく、儀典をおろそかにしてはならぬのである。

我が國は古來禮儀の正しい國である。昔の支那人も日本を指して君子國と言つた。君子といふのは禮儀のある、道德のある紳士といふ意味である。今の西洋人も、日本人は禮儀があつて、言つて歎賞してゐる。日本人はお辭儀、あいさつからして丁寧である。互に頭を低くしてあいさつする。障子の開閉も靜かにする。人に物を渡す時にも、人から受取る時にも、それらの作法があつて、饗應する時、饗應される時、主客の禮儀は殊に正しい。人に物を贈る時に水引をかけ、のしを附けるといふ習慣も、外國にはない事である。家としては長幼の序が正しく、國としては君臣の分が

饗應 飲食で人をも  
てなすこと。  
水引 こよりにのり  
を引いて乾固  
めたものを進  
物を結ぶに用  
ひる。



敬語  
敬意を表す爲  
に用ひる語。

親疎  
したしいこと  
とうといこと。

自稱  
自分をいふ  
なへ。

對稱  
あひてをいふ  
となへ。

定まつて居つて、上下尊卑の別が、家にも國にも昔から明らかに認められてをるから、それが即ち儀となり、則となつたのである。禮儀正しい日本の國風が言語の上に現れてをる。我が國の言語は非常に敬語に富んでをる。目上に對する言語と、目下に對する言語とは全然違ふ。家の中に於ても長幼尊卑の區別がある。まして朋友他人に對しては、親疎、貴賤によつてそれ相當の言葉を使はなければならぬ。僕、私、わたし、手前などの自稱の場合、あなた、お前、君、先生などの對稱の場合、我等は子供の頃から自然に覺えて、使ひ分けてをるのである。行くといふ言葉にも、對手によつて、自分ならば「行きます」、參ります、他人ならば「行かれます」、いらつしやいます、「お出でになります」など色々ある。英語ではいかなる場合でも「I go, you go」で濟むのである。物の名にも「おや」「御」をつけ、その他の語にも「おうつくしう」「おめでたう」などとおを附ける事が

四民平等  
昔は武士は農  
工商等より一  
段上の者とさ  
れてゐたが、  
明治維新とな  
つてこの區別  
がなくなり、  
四民は一樣な  
ものとなつた。  
折衷する  
兩方を適當に  
取りあはせる  
こと。  
生存競争  
生物が各自の  
生命を永存す  
る事について  
互に相争ふこ

ある。

敬語の用法は近世になつて殊に澤山になつたのであるが、大昔から存在してゐたのである。天皇の御住居を普通の「ヤ(家)」から區別する爲に「ミヤ(御家、宮)」と言ひ、天皇の御外出を普通の人の出あるき「ユキ(行)」と區別する爲に「ミユキ(御行、行幸)」と言つたのは、太古からのしきたりである。君臣の分の定まつた國としては當然の事である。

今日は昔の士農工商の別がなくなつて、四民平等となり、廣く世界各國民とも交際する様になつたので、禮儀作法に於ても、多少の變遷を來しつゝ、ある時代である。朝廷の儀式にも外國の禮儀や作法も多少折衷される様になつた時代である。昔の優長な時とは違つて、生存競争の烈しい時世であるから、簡易にすべき事は簡易にするはよいが、さりとて、これが爲に古來の我が國の



美風を失つてはならぬ。西洋の家とは異なつてゐる日本の家庭の事を考へねばならぬ。西洋の國とは異なつてゐる日本の國家の事を考へねばならぬ。

禮儀作法は大人でなければ入らぬものの様に考へ、學生時代は粗暴で濟して行けばよいと思つてゐる人がある。學問を修業する者が容姿態度にのみ心を配るのは感心しないが、粗暴と活潑とを混同するのもよろしくない。學生は學生相當の禮儀作法を心得、家庭にあつても、學校へ出て、法の外に儀を守らねばならぬ。殊に言葉遣に於ては注意が必要である。例へば、先生に對して「僕」と言つたり、他人に對して「うちのお父さん」などと言ふのも、中學生としては慎むべき事である。

すべて禮儀作法を他人の爲に守ると思ふのは間違である。禮儀作法は自己の品位を高める爲のもので、これを疎にする者は、

(一)長野縣の西南部、西筑摩郡の地、木曾山脈の南と飛騨山脈の南とに國境をなす。木曾谷地に屬する。木曾冠者と號した。治承中、仁王の令旨を奉じて、兵を擧げ、平氏を討つた。後、朝議、壽永三年(一一八四年)に、義經の弟範頼、義經に滅され、習熟とよくなれること。習練。

禮儀作法(自修文)

つまり自己を卑しくする者である。(一)木曾の山中に育つた源義仲は、京都へ出て無作法者、無禮者として笑はれた。いかに武勇であつても、いかに學問があつても、全然禮儀作法を知らぬ者は、紳士としての資格がない。英國の學校では、從來殊にこの紳士教育といふ事に重きをおいて、特に禮儀作法に習熟せしめる。東洋君子國の學生は、また決してこの方面を忘れてはならぬ。禮儀作法も、言葉遣も、自己の修養如何が外に表れる一端である。道德の徳もノリと訓むので、儀を守る事が即ち徳に合ふのである。服装を整へるのも禮儀を守る所以である。衣服は單に寒さを防ぐ爲の物でなく、文明社會では儀容を整へる爲に用ひられる。それ故、寒さを防ぐ必要のない夏の日でも、眞裸で暮すのは無作法である。片肌脱ぐのでも不行儀である。日本で冠位十二階を定められたのは推古天皇の御代で、爾來



かたびら(帷子) 昔、裏のない衣服、即ちひとへもの、總名、後世は麻、絲で織つた夏衣をもいふ。

大禮服 重大なおほやけの儀式に用ひる禮服。官位、文武の差別によつて異なる。

燕尾服 上著の下腹のあたりから前後は割れ、燕の尾の様になつてゐる。

フロックコート 洋服の上著の一種で、膝のあたりまでであるもの。

色々變遷はあつたが、禮服によつて官位を定め、上下を分つ事は、徳川幕府の末の世までも、皆それ〴〵に定められてゐた。且また何月からはあはせ、何月からはかたびらなどといふ規定さへあつた。明治の大御代では、西洋服に據つて文武官の禮装を定められ、文武官の大禮服以外には燕尾服を以て通常禮服とし、フロックコートを通常服と定められた。日本服には表向の禮服はないが、今普通に行はれてゐるのは紋附羽織袴である。中學生の服裝としては、大抵の學校で制服制帽を規定してゐる。制服の規定がない所でも、制帽だけは必ず定まつてゐるが、日本服の場合に缺く事の出来ない物は袴である。學生は日本服で外出する場合には、必ず袴を用ひるがよい。制帽だけで袴を著けぬのは殊に見苦しい。

服裝を整へるのはよいが、服裝を華美にしてはならぬ。服裝を

むさぐるしい きたならしい、きたない。

磊落 舉動が明白活潑で物事にとことほらないこと。

華族 明治二年に公家及び諸大名に賜はつた族稱。これを公、侯、伯、子、男の五等に分ち、國家に功勞あつた者も特旨を以てこの階級に列せられる。律せられる。たゞされる。

むさぐるしからぬ様にするのは望ましいが、餘りに服裝や容儀を氣にしてはならぬ。従來は書生風と言つて、わざと破帽弊衣を著て、磊落な風を装ふ様な事が行はれたが、好んでそんな風を學ぶのも、またよろしくない。さりとして衣服から帽子、靴まで、家の富裕であるがまゝに贅澤な品物を用ひるのなどは、生徒の身分としては必ず避くべき事である。飽くまでも服裝は儀の一部分である。と考へて、他人に禮を失はない限り、自己の品位を墜さない様に注意すればよいのである。

何につけても身分といふ事を考へるのが必要である。父母の慈愛によつて學校に通ふ學生の身分としては、たとひ家計に餘裕があつても、決してむだな事をしてはならぬ。軍隊に入つては、華族でも富豪でも、皆一樣の衣食住の中に律せられて、貴賤貧富の區別がなくなる。學生生活もまたこれと同様で、學問の修業を



する間、學生といふ境遇にある間は、何人も平等に、學生の身分相應な生活をするのが當然である。學用品でも、決して粗末にし、むだな使ひ様をしてはならぬ。學生としての旅行には、父母に伴なはれる場合は別として、いかに富裕な人でも、三等列車で澤山である。

一九 南洋探検

澁川玄耳

蜜柑の類は我が國にはもとなかつた。何時でも香しい果物だといふので、年々手に入らぬ不時香果所々果物と呼ばれ、得難い物として非常に珍重された。(一)垂仁天皇の時、南洋の或島にこの美しい果物があるといふ事が聞えたので、天皇は田道間守といふ航海に長けた人を選んで、南洋の視察を兼ねて、珍しい果物

(一)新聞記者。名は柳次郎。野は十とともし。大熊も稱載。五年。大正。十五年。五

(二)第十一代。

渺茫

を採つてくる様にお命じになつた。この名譽ある選拔を蒙つて、田道間守は大いに喜び、堅固な船を造り、澤山な食料を積みこみ、達者を水夫を募つて、十分なしたくを整へた。北風のそよよと吹く日に帆を揚げると、忽ちに渺茫たる大洋に乗出した。南へ々と走り續けて、十日經ち一月經つうちに、だんく貯への飲食物も乏しくなつた。或は雨水を受け、て飲んだり、或は海の魚を捕つて食べたりして、饑渴を凌ぎながら、屈せず撓まず航海を續ける。島影を見れば直ちに船を寄せて上陸して見るけれども、椰子や芭蕉は茂つてゐるが、肝心の蜜柑の樹は見つからない。し方がないから、糧食や飲料水などを積みこんでは船を出し、またあてどもなく大

饑渴



當世の國

(噂)

洋を走り廻つて、島といふ島は見つかり次第探検する。かうして幾年か萬里の波上に漂つてゐたが、遂にその常世の國を發見して、うはさに聞いた蜜柑の林を見出した。枝もたわゝに百千の黄金の様な實の生つてゐる有様は、何と譬へ様もない美しさである。試に食べてみると、桃にも柿にも比べ様のない香しい匂、うまい味である。長い船路の疲も癒えて、鬱した胸も開き、曇つた心も晴れる。いかなる病も立所に消えて、命も延びる様な味である。眞に我が天皇のお求めになる不思議な果物だと、感心もし喜びもして、實も葉も附いたのを八枝、實ばかりのを八枝、併せて十六の大きな枝を採り、船に積みこんで早速その島を離れ、一刻も早く日本

御感にあづかる

に歸つて天皇に献上しようとして船を出した。今度は北へくと走つたのだが、何千里とも知れない廣い大洋であるから、いくら氣をあせつても、風や波は思ふまゝにはならぬ。歸りにもまた幾年かかゝつて、往復十年で漸く日本に歸著した。いざ天皇の御感にあづからうと、喜び勇んで上陸してみると、悲しいかな、天皇は既におかくれになつて、最早幾年か経つてゐたのであつた。

田道間守の失望は譬へ様もない。困難が多かつただけ残念さも強い。十年の長い月日の苦心が水の泡になつたかと思ふと、涙がはらゝと落ちる。せつかく採つて來たのであるから、半分は皇后に獻じ、残つた葉附きの四枝、實ばかりの



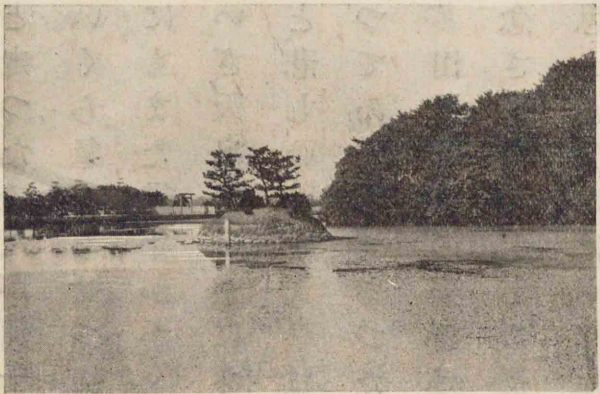
(一)奈良縣生駒郡  
伏見村大字平  
松の東。菅原  
ふ。見東陵とい

四枝を天皇の御陵の前に積上げて、その前にひれ伏して男

泣きに泣き、

「常世の國の果物。あゝこの香しい  
木の實を採つて参りました。田道  
間守只今此所に持つて参りまし  
た。あゝ、我が君。」

と繰返し、涙聲を張上げて申し  
上げて、地下の天皇はどうして御  
答へにならう。田道間守はとうとう  
そのまゝ、御陵の前に叫び死をして



(中央)墓の守間道田と(右)陵御の皇天仁垂

しまつた。

餘りのあはれさに、日本に始めてのこの果物を、田道間守  
に名を取つて、橘と呼ぶ事になつたといふ。——古事記噺——

二〇 我が幼時

新井白石

(一)學者、徳川幕  
府の政治顧問  
名は君美。江  
戸の人。享保  
十年(一三三  
五年)歿。年六  
十九。

我が六歳の夏の頃、上松と言ひし人の少し文字などあり

しが、七言絶句の詩一首教へてその意を解きかせしに、や

がて誦をなしければ、三首まで教へられしを人にも講じ聞

かせたりき。この兒、文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめ  
らるべし。など、かの人も言ひしかど、頑なる昔人たちの言ひ  
しは、昔より言傳へし事あり。利根、氣根、黄金の三こんなくし  
ては、學匠は成り難し。と言ふなり。この兒、利根こそ生れつき

誦をなす  
文才

學匠







おほやう

なるに目覺むる心地すれど、しばし程經ぬれば身暖になり  
て、また睡くなりぬれば、水をかぶる事前の如くす。二たび水  
をかぶりぬる程には、おほやうは課も滿てたりき。これ我が  
九歳の秋冬の間の事なり。

かたの如く  
かゝりし程に、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文を  
ば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋また課を立てられ  
て、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて十日のうちに  
淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を  
終へしかば、冊になして戸部に見せまゐらす。賞め給ふ事大  
方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ど  
も、大方は我に命ぜられき。

（一）卷。僧玄惠の作。漢文體の消息文集で、習字の手本として一時盛に用ひられた。玄惠は學僧。正平五年（一一〇〇年）八十二歳で寂した。淨寫

また十一歳の時に、我が父の友の關と言ひし人の子供は  
太刀打の技に勝れて、人に教ふる事ありしを、我にもこの技  
教へられん事を望みしに、わぬし未だ幼し。これ等の技學ば  
ん事尙早かりと言ふ。さこそはべるべけれど、太刀使ふ事少  
しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせん事誠に不用の事にや。  
と言ひしかば、のたまふ所誠に然なり。とて、傳へて習はしめ  
たり。かゝりし程に、その年十六になりし者の、我と藝を試み  
んと言ひしかば、木刀を執りて三たび合ひて、三たびまで勝  
つ事を得たりしにぞ、人々もまた興に入りて笑ひける。

—折たく柴の記—



二一 勁松は歳寒にあらはる

をりくは遊ぶいとまのある人の

いとまなしとて書よまぬかな。

學ぶに暇あらずと謂ふ者は、暇ありと雖もまた學

ぶ能はず。(謂學不暇者、雖暇亦不能學矣。)

○

みな人の力のかぎりつくしてし

のちにぞたのめ伊勢の大神。

人事を盡して天命を待つ。(盡人事而待天命。)

○

わざはひの門は口ぞとつゝしみて

ものいふたびに心もちひよ。

ものいへばくちびる寒し秋のかぜ。

口はこれ禍の門。舌はこれ禍の根。(口是禍之門。舌是禍之根。)

病は口より入り、禍は口より出づ。(病從口入、禍從口出。)

○

孝行をしたい時分に親はなし。

樹靜かならんと欲すれども風止まず。子養はんと欲

すれども親在さず。(樹欲靜而風不止。子欲養而親不在。)

○



人の子の親になりてぞわが親の

思はいとゞおもひ知るらん。

子を養ひて方めて父母の恩を知り、身を立てて方め

て人の辛苦を知る。(養子方知父母恩立身方知人辛苦)

○

うへを學ぶしもとやいはん水の月。

上好むものあれば、下必ずこれより甚だしきものあ

り。(上有好者下必有甚焉者矣)

○

おこたらず行かば千里のはても見ん

うしのあゆみのよしおそくとも。

九層の臺も累土より起り、千里の行も足下より始る。

(九層之臺起於累土千里之行始於足下)

冬さむみ後にしほむといふなれど

かはらざりけり松のみどりは。

ゆきふりて年のくれぬる時にこそ

つひにもみぢぬ松も見えけれ。

歳寒うして然る後に松柏の後凋を知る。(歳寒然後知

松柏之後凋)

勁松は歳寒きに彰れ、貞臣は國危きに見る。(勁松彰於

歳寒、貞臣見於國危)

勁松

後凋



士窮して節義を見、世亂れて忠臣を識る。(士窮見節義、世亂識忠臣。)

二二 良雪和尚

元祿十四年三月十八日、江戸からの早打が赤穂に到着して、城主浅野内匠頭長矩が、敕使接伴の一條から、吉良吉央の辱を受けてこれを傷つけ、遂に死を賜はつて、主家の一大事となつた事を告げた。家中の諸士は悉く城内に集ひ、額を鳩めて善後の評議を凝した。浅野家の菩提寺華岳寺の住職惠光和尚は、翌日の早朝登城して謹んで弔詞を述べ、國老大石内藏之助に面會を求めた。しかし、内藏之助はまだ出仕して

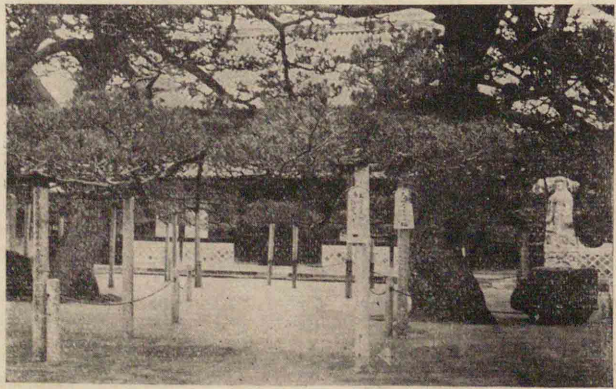
早打 (一)兵庫縣(播磨)赤穂郡、浅野氏の居城地。  
(二)長直の孫。元祿十四年(一七〇一年)三月十六日、吉良吉央を斬つて、死を賜はつた。時に年三十五。  
(三)上野介と稱した。幕府麾下の士で、代々高家に列して儀を通じてゐた。長矩の遺臣。元祿十四年(一七〇一年)二月十七日に殺された。  
(四)善後(赤穂)にある。台雲山と號する。曹洞宗。

納所

(嘸)

重い口調

居られぬとの事で、そのまゝ引取つたが、適大石家は歸り途に當るので、立寄つて惠光參上の旨を披露すると、良雄は迎へてこれを奥へ請じた。この時、惠光和尚の法弟で華岳寺の納所であつた良雪は、和尚の供をして居つたのであつた。惠光和尚は一應のあいさつを終へた後、  
「このたびは測らざる大變で、さぞさぞ御當惑で御座らう。」  
と言ふと、良雄も重い口調で、



華岳寺



(擡)

「意外の變で、實に當惑致す。」

と答へた。すると、次の間に控へてゐた良雪和尚は、突然顔をもち上げて、

「武士たる者が、事に臨んで當惑するとは、いかなる事ぞ。」と言つた。

惠光和尚は、良雪が暴言を吐いたので、若し良雄の怒を招きはせぬかと氣を揉んで、勿々に暇を告げた。良雄は良雪を見遣つたまゝ、無言で居つた。良雪は師の後に従つて去つた。翌日、良雄は華岳寺へ參詣に來た。淺野家代々、大石家代々の墳墓に香華を手向けて後、惠光和尚に對面し、「昨日お連れになつた御供の御出家は、何といふ御方で御座るか」と尋ね

(態)

た。和尚は問に應じて、その良雪といふ僧である事を告げ、且良雄の求によつて、他寺にをる良雪を華岳寺へ呼寄せた。暫くすると良雪が來た。粗末な墨染の法衣に、鼠木綿の著物を著てをる。良雄は次の間に兩手をついた良雪に向つて、「昨日はせつかくのお越しを失禮致した。その時のお言葉に『武士たる者が事に臨んで當惑する法があるか。』と仰せられた。誠に道理と承つたが、意外至極の大變で、恥づかしながらはたと當惑致しをる。貴僧に良い工夫でも御座るか。あらば御教示が願ひたく、わざ／＼參上致して御座る。」と丁寧と言入れた。

假にも城代家老たる大石殿に對つて、無禮の言を發した



糺す

のであるから、必ず罪を糺されるであらうと思つて、惠光和尚は人知れず胸を轟かしたのであつたが、思ひも寄らぬこの慇懃な言葉を聞いて、流石は大石殿、見る影もなき納所風情まろぬまのの言つた事をも心に留めて、禮を厚うしてわざ／＼尋ねられた。小事をも疎にせぬ大腹中、感服の外はない。しかし、良雪は例の氣象であるから、再び失禮な返答をしはせぬかと、内々心配してをると、良雪はうなだれてゐた頭をもたげ、「君辱めらるれば臣死す。この一語で盡きてゐはしませぬか。」

と言つた。良雄は膝を拍つて、

「斯程の事は常々覺悟を致しながら、事に臨んで當惑致し

迷の雲

た不明は、恥入る所で御座る。迷の雲もこれで晴れた。わざわざお出で下されて、何とも恐縮おそれに存ずる。」と、また丁寧にあいさつして歸邸した。良雄の大覺悟は、この一言で決したと傳へられる。

それから一家中の總會議となつた。城を枕に討死しようとの説も出で、穩かに御舍弟大學(一)の相續を願ひ出でようとの説も出で、赤穂の城中は大混亂大騒擾のうち、數日を過ぎた。が、いざとなると命の惜しい人々も多く、最初の三百六十餘人が三百人となり、二百人となり、大野九郎兵衛が逃走してからは、一人減り二人減りして、愈、近日城受取の上使がくるといふ頃には、僅かに六十餘人の決死者が残つたので

(一)名は長廣。

(二)淺野家老の一人。性貪慾で、お金の分配の後に姿を隠した。



首級

あつた。しかも、亡君の遺志を繼いで、吉良上野介の首級を申し受けようと決するまでには、天下の勢を引受けて一合戦しようとの説も出で、これに贊する者も少くなく、容易に協議の纏りがつかぬので、これには良雄も苦心した様であつた。

この籠城説の盛であつた頃、適、良雄は良雪を訪れた。和尚は村人と共に碁を圍んでゐた。

良雄が通つても、和尚は碁に夢中であつた。良雄から二言三言話しかけたが、良雪ははか／＼しく返答もしなかつた。大抵の人ならば立腹して立つ所を、良雄は平然として色をも變へず、靜かに勝負の終るのを待つてゐた。

やがて良雪は良雄に氣附いて奥の間へ導き、自分は次の間に下つて、

「城中の様子はいかに決して御座るか。」

と問うた。良雄は膝を進めて、

「血氣に逸る若侍ども、天下の勢を引受けて籠城致さうとのみ申し張る。先君の心を籠められた城を、空しく引渡すも無念と思ふ心根も道理と存ずる。貴僧の思召承りたい。」と言つた。時に良雪は容を改めて、

「籠城討死が武士の道にかなひたる事ならば、立派に籠城の覺悟をせらるゝがよからう。」と言ふ。良雄はこれを聞いて、

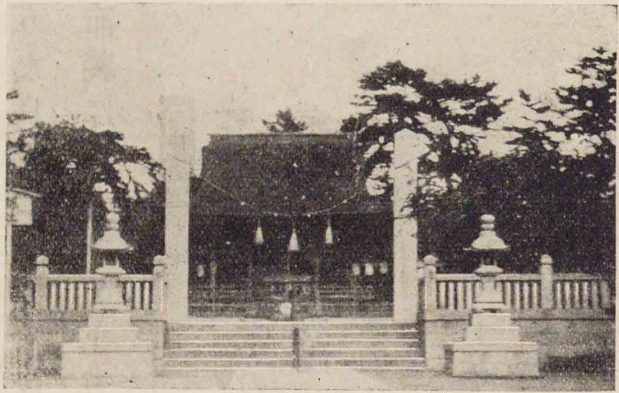


「さらば貴僧も、籠城の外に途なしとの思召か。」  
良雪、

「しかし、多人數籠城する要はない。先方の受取らうと言ふを此方は渡すまいと言ふ。弱い者が負け、強い者が勝つに決してをる。假にも天下の勢を引受けて、猫の額を見るが如き小城に立籠る事、最後の運命は知れてある。唯むざむざとは渡さぬといふ志さへとほればよい。貴殿一人籠城せられよ。一人にてするも百人にてするも、籠城する志は同じ事。遅かれ速かれ取上げられるは同じ事。忠義の武士を見殺にするはよからず。貴殿一人にて事足る儀と存ずる。」

神文

(一)京都市東山区  
今此所に良雄  
の邸址がある。



大石神社

良雄は良雪の言に感じて、深く心に覺悟し、そのまゝ城に歸つたが、幸に議變じて、時節を待つて仇を討つに決し、神文に血を染めて、潔く開城する事になつた。良雄がこの間の處分に就いては、良雪に負ふ所が少くなかつた。かく良雄は、良雪を信ずる事極めて深く、良雪もまた良雄の志を察して、これを助ける事が多かつた。良雪は、良雄が山科(やまなか)に住んでゐた時には、わざわざ二度までも訪問して、諸種の相談に與つた。さて愈、機會が熟して、同



志と共に江戸に下つてからも、良雪はまた良雄の僑居を訪うた。良雄の有力な後楯として働いた良雪の苦辛は、義士の節義にもをさく劣らないのである。  
〔義士餘談に據る〕

自修文

大石家の離散

〔一〕福本日南

〔一〕史論家。名は誠。福岡縣の歿。大正十年。年六十。

嫡男 家督を相続する男子。よつぎ。

〔二〕名は良金。主税と稱した。討入の際、後門攻入の隊長となつた。元禄十六年〔二〕三六三年自刃。年十六。

成童 十五歳以上の少年。

赤穂の城を明渡した後、深謀を胸に藏して京の山科に隠栖してゐた大石内藏助は、一日嫡男松之丞唯一人を書齋に呼んだ。松之丞は、  
 「召しまするか。」  
 とはいつて来て、両手をついた。内藏助はじつとその面を視つめ、形を正して言出した、  
 「人生れて十五を成童といふといふ。御身も何時の間にか成童

理義 道理。すぢみち。

義 人のふみ行ふべき正しい道。

部屋住 嫡子がまだ家督を相続しない間の身分。

優遊する ゆつたりする。ゆるやかにする。

に達したから、あらく理義の辨も出来たであらう。それにつき、善くこの父が申し聽ける言に心を留められよ。凡そ人の道は義より大なるものはないが、さてその義は、君臣より重いものはない。御身が知られる様に、この父は先君の御厚恩を受けた者であつてみれば、義として死を以てこの御厚恩に報い奉らねばならぬ。御身は當時まだ部屋住の事にて、直ちに君の祿を受けたといふのではないが、この歳に至るまで飽くまで食ひ、暖に衣て歳月を優遊し、とにもかくにも理義の一端をも辨へる様になつたのはどなたの賜ぞ。全く先君の御厚恩である。今この父は一死以て君國に報いようと存ずるが、御身は父と俱に生を捐てて義を取る心はないか。父として我が子に死を勧めるのは、誠に人情として忍びない所であるが、不義にして生を保ち、臭を千歳に遺すのと、義の爲に死に就いて芳を後世



何れを何れ云

云 どちらがいゝ

と思ふか。

至情

この上もない

人情

追隨する

つきしたがふ。

(一)良雄の第二子

松之丞の弟

(二)兵庫縣(但馬

國)城崎郡。

はふり落つる

とめどもなく

落ちる。

不肖

父に似ない子

に流すのと、何れを何れと存ぜられる。自分が御身に死ねと言ふのも、大義の上から深く御身を愛する至情からである。とは言へ、御身に若しこの理の聽分けがないなら、父が辭もこれまでである。この上父に追隨する要もない。只今御身の母には永く離縁を與へ、吉千代以下をそれに託して、豊岡に遣さうと存ずるから、御身も母に従つて此所を去れ。善く、思慮して答へられよ。」

と申し聽けた。松之丞ははふり落つる涙を拂つて、恨めしげに父の顔を見上げた。

「父上には何故さ様に御情なき言を仰せられます。私不肖で御座りますれど、日頃の御教訓によりまして、大義の一端は辨へて居ります。いかに致して父上を棄て、君侯に背き、不義の名を取る事を致しませう。願はくは父上と御一緒に死に就い

辭涼しく

ことばがいさ

ぎよいこと。

きつぱりと。

肺腑の底

心の底。衷心。

お成り

お出で。

頂戴仰せ附け

られ

頂戴する様に

おほせつけら

れることで、

即ち賜はるこ

と。

御目見

貴人にお會ひ

すること。

うい兒

かしこい兒。

て、天下後世に父子國に殉じたと稱せられたう存じまする。」と、辭涼しく言切つた。

「おう、それでこそ我が兒。」

とは、内藏助が肺腑の底から出た語であつた。

内藏助は稍平靜に復り、

「回顧すれば御身が誕生の後であつた、先君内匠頭侯には一日我が家にお成りなされ、御身が健かな體を御覽じて、守刀にて御太刀頂戴仰せ附けられた事もあつた。また御身の記憶にあるかあらぬか、御身が四五歳の時であつた。御身を伴なうて御目見申し上げた節、御側近く御身を召させられ、松之丞は何が好きか。と問はせられた。そのをり御身が坊はお馬が欲しう御座ります。と申し上げた。すると先君は、うい兒。と仰せられて、御厩から多くの御乗馬をお引かせになつて、さあ坊、何れで



斷乎きつぱりきめて動かさないこと。

身を以て國に許す國の爲に身を捧げる。

内室奥方。

三族三つの親族關係。

孫父と子と

族または父

母または父

孫母と兄弟と子

遠慮遠慮

の考さき／＼まで

も選んで取れ。』とて、やがて駿馬しゅんま一頭を賜はつた。先君の御身を愛せられたのはこの通りであつた。』

と申し聴けた。松之丞は益々感奮し、これよりして一個の少年が、斷乎として身を以て國に許すの覺悟を定めた。

さらばとて内藏助は更に内室ないしつを呼び、これに離縁を申し渡した。内室の悲歎は言はう様もないが、その意味は明らかに讀める。快舉一たび發した日、せめては罪の三族に及ばない様にとの遠慮からである。賢明な内室はやがて三人の子供を引連れ、永き別れを山科に告げて、悄悄せうせうとして但馬路たにまぢへ赴いた。

やがて内藏助は松之丞に元服させて、大石主税良金おおいしちかと稱へさせた。良金は時に年十五歳であつたが、身の丈五尺七寸の堂々たる偉丈夫であつた。

—元祿快舉錄—

(一) 詩人。宮城縣の人。明治二十三年生。

二三 希望

(一) 白鳥省吾

深い雪の下に

薔薇の芽は輝き、

闇に光がかくされてゐる。

待つものに喜がくる。

見よ、冬の小鳥も飢ゑず

つねに樂しげに歌ひ、

遠い白金の帆も

つねにその水路を知る。

生くることの喜よ、

希望の喜よ。



(一) 詩人。明治二十五年東京市に生れた。  
(2) Shelley, P. B. 西紀一七九二—一八二二年)

(三) 新潟縣(越後國)長岡市。

### 二四 人工樂園

堀口 大學<sup>(一)</sup>

「冬來りなばやがて春遠からじ」とは、或有名な英詩人<sup>(二)</sup>が、西風に寄する賦<sup>(三)</sup>の中の文句ださうです。それなのに、私が其所で少年時代を過した北越のあの市<sup>(三)</sup>では、この詩の文句は通用しないのです。其所では冬がそんなに長いのです。冬來れども春尙遠からん」と歌ふべきなのです。早くも十月の終の頃には、自然はすつかり冬枯れてしまつて、早い年には、雪さへも降始めるのです。冷い濕りがちな北風が吹いて、空は煤で塗りつぶした様な薄ぎたない灰色です。

そして或朝、眠から覺めて見ると、野も山も、原も畑も、見わたす限り唯一面に、厚い雪の蒲團に包まれて、寢息の音も立てずに眠つてゐるのです。白い眠。



雪むる (福田豊四郎筆)

長い眠。くる年の四月まで静かな、そして冷い眠。死んだのではないでせうか。この白さ——それは死布<sup>か</sup>の白さです。この静けさ。人氣なさ。——それは墓の中の静けさです。人氣なさです。そしてたつた一つの黒いもの、鴉ばかりが不吉に

鳴いて。

その日から人たちは、地を踏まずに、地を見ずに、來年の四



(火燧)

冬眠

(Lamp. 洋燈)

月まで、窓よりも高く積つた雪の中にうづまつて、こたつの櫓に両手をかけて、戸外の吹雪の音に耳を澄ませながら、冬眠の蛇の様に身動もせず、黄色いランプ(一)の光の下に黙りこんで、各自に思つてゐるのです。こんな夜にこそ、吹雪に路を失つた一人旅の男が、眠たくつて眠たくつてたまらなくなつて、はてしなく大きな蒲團の上に、身を横たへると思ひながら、凍え死んで行くのだと。

(Yaka)

(種)

今ではこの同じ北越の市が、スキー(二)の名所になつたといふ事です。しかし、私が其所に住んでゐた頃には、子供たちは雪の斜面を滑り下る玩具のそりさへも持たなかつたのです。凍つて固くなつた雪の上を散歩する「しみ渡り」雪を丸め

て堅いたまを作つて、お互に打當てて勝敗を定める「きんこ」雪を積上げて作つたお城を攻合ふ戦争ごつこ。それより外に、子供たちは冬の戸外の遊は持たなかつたのです。それもちきに手足が痛い程冷えて來て、決してさう愉快ではないのです。

魚が水に棲む様に、人は地に住む生きものです。かうして二月も三月も、雪に包まれた世界に住んで、地を見ずに暮す事は、私には堪へ得ぬ苦痛でした。それで私はよく庭に出て、五尺も六尺も降積つて、下の方は凍つて氷塊の様に堅くなつた雪を、重い「こすき」で、岩を穿つ人の様に難儀して、幾日も幾日も費して、地の出る所まで掘下げるのでした。其所に、雪



の穴の奥に二尺四方程に現れた地べたの美しかつた事を、私は今でも忘れません。私はすつぽりとその穴にはまりこんで、久々で踏む大地の踏心地に、小躍して歡喜したものです。おわかりでせうか、この心持、雪深い國に住む子が春を待つ間の心です。見る限り雪にうづもれた銀の世界の中に、窈に穿つたその小さな穴。それがその頃の私には、人工樂園であつたのでした。やがてくる地上の春を待ちながら。

春のくるのは四月です。どつと一度にくるのです。津浪の様に押寄せて、柳、櫻をこきまぜて、梅も桃も一緒に咲いて。おわかりでせうか、雪の深い國に住む人たちが、久々で見る地の色の美しさを、萌出る草の芽の緑の喜ばしさを、長い

(一) 見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春のにしきなりける。(古今集、素性法師)

陰鬱

長い陰鬱な冬のあとにくる明るい春の嬉しさを。おわかりでせうか。

雪路をひらく

(一) 井上康文

(一) 詩人。名は康治。神奈川縣の。明治三十年生。

雪。雪。雪。

銀無垢の山また山。

お、すばらしい雪肌に、

スキーマンは十字をゑがき、

Xを強くゑがきつける。

空も銀。山も銀。

その光の中を滑走する

冬の季節の勇者が、



(筆嵐青内坂) -キス

滑走



鮮かにゑがく痛快な路。

走れすべり飛べ、

雪の勇者よ。スキーマンよ。

ふかふかとした山肌

その痛快な路をひらけよ。

二五 春を待つ

北原白秋

(一) 詩人、歌人。名は隆吉。福岡縣の人。明治十八年生。

(鴨)

竹林の中にあつて春を待つ私のこの頃(一)も寂しいものだ。  
私は朝起きると、裏の赤い豆柿を見上げるのが常であつた。私は眺めるだけで堪能(二)した。豆柿には目白が来た、ひよが来た、百舌が来た。小禽の来て啄むにまかせた鈴なりの赤い

殺戮

(四)

實は、冬晴の孟宗の藪の下に、何時も明るく賑やかであつた。だが、この閑寂な風景にも、時ならぬ銃聲が響く。人が静かに観て楽しみ、小禽も楽しんでゐるものを、無作法にもその邸内(三)にまではいりこんで、爽快な殺戮を敢へてする者のあるには憤(四)られた。棹の尖に柿を突刺し、それにを(五)とりの籠を吊して藪蔭に狙つてゐるそこらの悪童も目に附いた。かうした時には、わけを話して立退いてもらつたが、まだ可なりに豆柿は美しかつた。或時いくらか遅く起きて見ると、そこら(六)がすつかり枯枝ばかりになつてゐたのには驚かれた。寒々とそれは見られたものである。地の上には、二つか三つかくづれて散らばつてゐたが、いかに昨日鳥が群がつて来てゐ



たといふにしても、かうまでにならうとは思へない事であつた。それから、あの胸の青い目白も集會をやめたし、百舌なども、孟宗の前を唯羽ばたいて翔けぬけるだけの影になつてしまつた。だが、この冬らしい眺の中にも、何かしら動いてゐる物があるのだ。

(黎)  
(羯鼓薊)  
庭は荒れるまゝにまかせておいたが、思ひきつて枯果てたコスモスや、あかざや、葉雞頭を刈つてしまふと、そこらが急に春めいて來た。出しつばなしの白木の椅子は、薄紫のかつこあざみの草叢に埋れたなりでまだ残してある。その傍に今まで氣も附かなかつた沈丁が浮出して、もう、つぼみが匂ひかけてゐる。南の庭境の水仙などは、もう青々と列を成

して、何れも張切れさうにふくらんでゐる。いや、一つ二つはもう涼しい瞳を開いた。ばつちりとしたものだ。

さうした小景に、竹林を透して、弱々しい鬱金の西日がさしわたるのだ。日向の竹の葉も明るくて閑かなものだが、日蔭の色は愈、青く沈んで、わびしい。竹と竹との幹にちらちらする光線より、微なほかない物はない。

私はこの頃、その家の前の竹林の中に、小さなバラックの湯殿を建てた。日の暮など、その鐵砲風呂に浸つて、西と東との小窓を開いてゐると、どちらにも竹が見える。梅の古木も見える。梅はもう、ちらほらと咲きかけてゐる。かさこそと落葉を搔くのは隣の雞である。一方には竹叢を透して、枯れく



蓬 齊

の鐵道草の原が見え、銚杉が見え、下の町の煙が見え、汽車の響が聞え、浪の音が聞える。一方には寺の庭の蜜柑の實が見え、山松の風が澄み、箱根連山の夕霞が靡く。秋の花

私はまた時々隣の庭から後の丘に昇る。路傍の薄も萩も枯盡して、わびしくなつたが、どうかすると、いゝ色の紅みがかつた紫の光澤に匂つて見える。

「や、此所の梅も咲きかけたな。これはいゝ。」

私はうちの子とそこらで日向ぼつこをする。

さゝやかな小竹の蔭などに、まだ一二輪のコスモスの残花を見る事もある。小田原は暖いなと思ふ。

其所此所の竹林には、はや下萌のよもぎやなづなが、鋭い

(蒲公英)

若い緑ですゝろぎ始めた。たんぼの伸びの早さには驚く。御形はもう黄の絮を紡ぎ始めた。返花ではないかなどと、しやがんで見直す事もある。

満を持す

春はもう動いてゐるのだ。あせらずともくる者はくる。竹林の閑寂の中に、私の詩情は今や満を持して、華を開く。へき春の黎明を待つてゐる。

——季節の窓——

(一)鐵道省運輸局  
囑託。名は滿  
雄。熊本縣の  
生人。明治七年

二六 梅の花

谷口梨花

梅一輪々々づゝのあたゝかさ。誠に私たちは、この梅の花の一輪づゝつぼみを破る毎に、春の氣が天地に擴がつて行く様な感じを覺える。春は梅邊



の風は梅の枝の辺にやうやくもつてある。  
に到る第一風春のおとづれば、先づこの梅の開花に始るの  
である。  
梅の花と花に看かす。

春の霞のこぼれ。  
まだ雪の降る早くから

霜雪を凌ぐとも言ひ、雪中梅とも稱へ、私たちの祖先は、古  
くからこの梅の花を早春第一の花として特に觀賞した。古  
歌に

(一)古今和歌集の  
序に見える。

○ 難波津に咲くやこの花冬ごもり 作 王仁  
いまを春べと咲くやこの花。

株を奪ふ

とあるのも、この梅の花を歌つたもので、昔は唯花と言へば、  
この梅の花を言つた。櫻が梅の株を奪つて花の代表的のも  
のとなつたのは、ずつと後世の事である。  
櫻の花の艶麗優美なのに對して、梅の花は清楚剛毅の氣

(一)宋の隱士林逋  
の山園小梅の  
詩中の句。

韻を有してゐる。しかもその幹や枝ぶりや、全體の姿に一種  
言ふべからざる雅致があり、しかもその花は馥郁たる清香  
を放つて、自ら人を酔はしめる。疎影横斜水清淺。暗香浮動月



暮るる山家 (川合玉堂筆)

黄昏梅花の風情は  
此所にその極致を  
現す。  
櫻はその樹の數  
が多くて、或は山谷

を埋め、或は一里二里も咲續く所に一層その美觀を現すの  
であるが、梅は敢へてその數の多きを要せぬ。藁家の藪蔭に  
一二本見出されるのも風情があれば、神寂びた玉垣の内や、



軒古き御寺の庭などに、不圖その香に催されて尋ね入る所  
に限りなき興趣を覚える。

梅をちこち南すべく北すべく。

蕪村は既にこの間の興趣を夙く道破してゐる。朗詠集に

梅があらうとちとちと笑ひあつてふが南にうつよか北の梅林にうたふか

東岸西岸の柳、遅速同じからず。

(東岸西岸之柳、遅速不同)

南枝北枝の梅、開落已に異り。

(南枝北枝之梅、開落已異)

と詠ぜられてゐるが、誠に唯ひと本の梅の樹にも、南枝が先  
づ開くかと思へば、北枝はまだつぼみ固うして微笑まず、風

(一)江戸時代の俳人。姓は谷口、後與謝といつた。名は寅攝津の人。天明三年(二四年六十七)歿。  
(二)和漢朗詠集。二卷。藤原公任が和歌と漢詩との朗詠を選んで並舉したものである。

雅の人をしてうたゝ焦心せしめるのである。

一本の梅に遅速を愛すかな。(愛ゆ)

蕪村はまた實に梅の花の精髓を會得してゐたのである。

川柳子は「梅にうぐひす櫻に生酔なり」と歌つてゐる。全く

櫻の花盛にはとかく生酔がつきがちであるが、梅には鶯柳

には燕である。また「鶯聲誘引して花下に来る」と白樂天も吟

じてゐる。これも梅の花を詠じたのである。また

青々としげりし中にこの梅の

はなはくれなゐやぶはくれ竹。

といふ狂歌があるが、これは「人酔、梅花竹影中」といふ詩の句  
と同趣を歌つたもので、くれ竹の緑の色と、紅梅の赤い色と

(一)唐の詩人。名は居易。大中年(西紀八四七年)歿。七十五。



の配合は、全く繪その物である。

梅の花かばかり匂ふ春の夜の

やみは風こそうれしかりけれ。

花は闇に隠れても、香は隠れぬいはゆる暗香浮動の風情は、

この花のみが誇り得る特色で、

闇の香を手折れば白し梅の花。

と也有も詠んでゐる。芭蕉には

春もやゝ景色とゝのふ月と梅。

といふ句があるが闇にかくろふ梅にも風情があれば、月に

匂ふ花にもまた異なつた風情があるのである。

(一)江戸時代の俳人。姓は横井。名は時敏。尾張藩の重臣で俳文をよくした。天明三年(一四四三年)四月八日生。歿年八十二。



(一)詩人、評論家。名は昌治。新潟縣の人。明治十六年生。油断

二七 雑草 (雑念)

相馬御風

少し油断をすると、すぐ雑草が蔓る。畑から庭の隅々まで綺麗にして置かうといふには、絶間なき注意と努力とが必要である。長い間積つてゐた雪が、やつとの事で解け去つたかと思ふと、その跡には一面にもう鮮かなみづ〜しい色をした雑草が、頭をのぞかしてゐる。土いちりに馴れない上につまらない小さな草でも、氣になりだすとたまらない私には、この雑草の處分は最も困難な、最も氣ぜはしい仕事の一つである。そこで、時には、どうかして絶対に雑草の生えない様にする事は出来ないものだらうかといふ様な事まで考へるのだが、しかし、絶対に雑草の生えないといふ様な場

氣ぜはしい



功德

邪魔

(呪)

所では、私どもに必要な植物もまたうまく育ちさうには思はれない。そればかりでなく、年々生える雑草のお蔭で、土の肥されつゝある功德は、また非常なものである。畑に取つては雑草は邪魔物であつて、同時に、それは大切な肥料である。一本の雑草すら育たない様な沙漠には、同時に、有用な植物も生えないし、美しい花も咲かない。

私はこんな様な事を、知つたり考へたりして、年々雑草の生えるのを、のろつたり感謝したりしてゐる。そして時には、私どもが自分等の爲に有用だとして、大切に培ひはぐくみつゝある所の諸の植物の運命と、その名もろくに知られず、満足に花一つ開く事も出来ない様な雑草の運命とを思ひ

荒む

比べて、深い想に沈む事さへある。しかも雑草は絶えない。年々歳々少しも人間の力を借りる事なしに、逸早く萌出る、伸びる、廣がる。

徒に雑念を蔓らせてしまふと、心は終に荒み果てるであらう。しかし雑念發生の盛な時は、即ち心の土の肥えてゐる時であらう。そしてそれは正に良い種を蒔くべき時である。雑念の草は刈られて、やがて良い種を生育する爲の肥料となる。私どもは、私どもの良い種を大切にしなければならぬ事は勿論であるが、それと共に、それを養ひ、それを育てる爲の肥料となるべき物を輕んじてはならない。種がいくら良くても、土が痩せてゐてはだめである。



雑草を耕地から除く事の必要な事は勿論であるが、それを用ひて土を肥す事も同じく必要である。近年稻田にわざわざ蓮華草の種を蒔いて繁茂させ、それを更に肥料として役立たせる事が、可なり盛に行はれてゐるが、これなどは一層興味の多い事實である。

—砂上漫筆—

### 二八 鳥の美

飯島魁<sup>(一)</sup>

風致といふものは、單に山の形や、水の姿や、それに美しい色彩の美を與へてゐる植物などばかりで組成されてゐるのではない。山容水態がいかに麗しくても、緑樹彩花がいかに美しくても、その間に動く何物かがなければ、風景は生き

<sup>(一)</sup>動物學者、  
市博士。濱松  
十年の。大正  
十二年歿。年六

山容水態

題材

た趣を生ぜぬ。昔から花鳥といふ。文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥とが重要な題材とされてゐる。殊に我が國の繪畫や詩歌には、花と鳥とが主要な地位を占め、その中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧弱なものとなつてしまふ。

<sup>(一)</sup>古今集卷三、  
よみ人知らず。

<sup>(一)</sup>わが宿の池の藤波咲きにけり

山ほととぎすいつか來鳴かん。

あしらふ

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結び附けて、始めて複雑な美が成立する。梅に鶯「卵の花に杜鵑」、蘆の花に雁といふ風に、四季それ「の」の花には、鳥が附屬物となつてゐる。

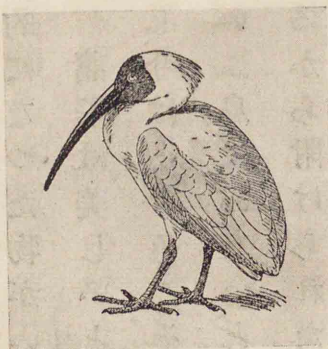


(一) 奈良市東大寺の南方から春日山の麓に至る野。  
(二) 南は相模野に隣り、北は利根川に至り、西は秩父に接し、東は海に接する。大平原を以て限る。

獨り鳥ばかりでなく、あらゆる動物は皆かく風致に美を加へてゐる。禽獸蟲魚は昔からの畫材であり、詩材である。春日野から鹿を奪ひ、武藏野から蟲を除いたならば、その春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ無味なものとなるであらう。それ程に美觀上の價值ある物を、人間が勝手氣まゝに捕殺する權利をもつてゐるであらうか。分り易く言へば、狩獵税を出しさへすれば、それで勝手に鳥獸を殺してもよいであらうか。わたしたちが擅に鳥獸の命を絶つその結果は、一年や二年では現れて來まいが、五年の後、十年の後は何れも更に二十年、三十年の後には、わたしたちの見た美しい鳥も、珍しい獸も皆姿を隠して、わたしたちの子孫はそれを見る事が出

(一) 「鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある。折りてかざるや、と。古今集、東三條左大臣ゆゝし。

誇大な言



來なくなりはずまいか。鶯の笠に縫ふてふ梅の花」とある。鶯とは、どんな鳥であらうといふ様な事になるかも知れぬ。かうなればゆゝしい一大問題である。わたしたちは、わたしたちの見た鳥や獸を、やはり子孫に遺して、子孫にも楽しませてやりたく思ふ。これは誇大な言ではない、日本の鳥類は今將に全滅せんとしつゝある。去年と今年とを比べて、その間の差異を發見する事は困難である。しかし、今日と十年前、二十年前と比べて見れば、その間に非常な差異のある事を何人も感知するであらう。過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十



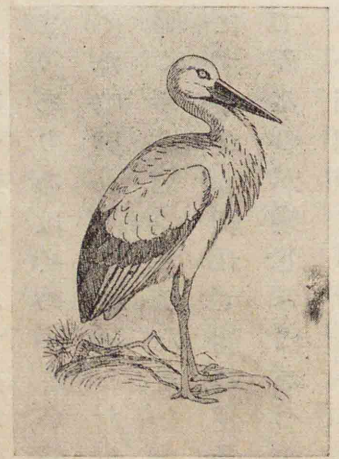
年後にどういふ現象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難くない。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狭い日本だけで觀察しても、既に滅亡して歴史的になつた物がいくらかもあるのである。

諸子は美しいとき色の色彩を知つてゐるであらう。しかし、今はとき色こそあれ、その色にこの名を負はせた朱鷺といふ鳥はゐない。とき色とは、その色が朱鷺の羽色に似てゐるから附けられた名であるが、この鳥は最早全滅しかつてゐて、容易にその姿を見る事が出来ない。葦田鶴の千代呼ばふと言はれた江戸の千代田城は勿論、江戸附近には多く鶴がゐたものであるのに、維新後はその影をだに見る事が

(一) 東京市京橋區、西本願寺。  
(二) 東京市淺草區、東本願寺。  
(三) 天恩山羅漢寺、黄蘗宗。今は東京府荏原郡日黒町に移された。

思案投首

出来なくなつた。こふのとりも昔は澤山ゐた。淺草の觀音へ行く子供は、皆こふのとりが見られると言つて喜んだものである。築地淺草の兩本願寺、本所の五百羅漢の屋根の上には、うよよとする程澤山こふのとりがゐたが、今は早全國一般にゐなくなつた。鷺の滅つた事も夥しいもので、昔は到る所の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見る事が出来たが、今日では御獵場以外これを見る事は出来ない。これはほんの二三の例である。その他あらゆる鳥類は、日本から姿を隠さうとしてゐるのである。誠に



こふのとり



風致の上から観て、ゆゝしい一大問題ではないか。

目録

九官鳥と鶯

土岐善麿

この鶯は、或朝ひよつくり窓から書齋へ飛びこんで來たのだ。わけもなく捕へられたので、そのまゝありあはせの小さい籠に飼ふ事にした。もとより鶯で、ろくな鳴聲ももつてはゐなかつたが、それでも「ほうほけきやう」と鳴く事は知つてゐた。水をやつたり、餌をやつたりしてゐるうちに、すつかり馴れて、朝の寢覺などに、夢現ゆめげんともなく枕の上で聞いてゐるのが、楽しみになつた。

茶の間の方には、前から九官鳥が(一)一羽飼つてあつた。「お早う」などはよく言へる様になつてゐたが、この鶯が稍離れた書齋の方で「ほうほけきやう」と鳴く様になつてから、じつと聞耳を立ててゐた九官鳥は何時の間にか、鶯が「ほう……」と鳴き始めると、すぐ

(一) 燕雀類の小鳥。支那の原産。物真似をよくするので愛翫される。

木魂  
やまびこ。

そのあとを承けて、「ほけきやう」と物真似のいたづらをする様になつた。「ほう……」と息をふくめてから、さて「ほけきやう」とほがらかに歌はうとしてゐる鶯にとつて、このどこからともなく聞えるお先走りの自分の歌聲は、山深くかへつてくる木魂こだまとは違つたもので、不思議な薄氣味の悪いものだつた。「ほけきやう」を續けるのを止めて、最初の「ほう……」といふのを少し永く延して、あとの不思議な歌聲を待つてゐると、またきつと「ほけきやう」と、鏡の反射の様に聞えてくる。鶯はこの怪しい不氣味さに堪へられなくなつて、遂に「ほけきやう」といふ歌聲を、自分の唇から出す事を憚る様になつた。「ほう……」と鳴いては、あとを續けずに、四邊をきよろきよろと見廻す。九官鳥は初のうち、「ほけきやう」といふ物真似を面白くも思つてゐたが、相手が歌はなくなつたので、自分も興がなくなつて、「ほけきやう」を鳴かなくなつたのだが、その間に



習性<sup>しゅせい</sup>

本當の鶯の方はまた、自分の歌聲も忘れた氣持になつて、唯「ほう」といふだけで止めてしまふ習性がついてしまつた。

「ほう……」と鳴くだけで「ほけきやう」のない歌聲は、藪鶯としても餘りに不器用だが、その後、口笛で教へこまうとしても、尙不思議がつて、どうしても相變らず「ほう……」といふだけしか鳴かない。

……これは且君の家での事なのだ。この間遊びに行くと、その書齋に鳥籠があつて、小さい鶯が首をかしげて「ほう……」と鳴いて、そのまま黙つてしまふのを、不審に思つて聞いた所が、こんな話をしてくれたのである。

一體九官鳥の本來の鳴聲は何といふのだらうか。鶯なら、どんな藪鶯でも「ほうほけきやう」と大抵は鳴くのだが、九官鳥は人間の話聲などの眞似は巧にするけれども、眞似はいかにうまくて

も、本來の鳴聲にはなり得ない。「お早う」と呼掛けても、九官鳥は人間にならないと同様に「ほう……」のあとを承けて「ほけきやう」と鳴いても、やはり鶯にはならないのだ。「ほう……」と鳴いただけで、あとを眞似られた爲に「ほけきやう」を忘れてしまつた鶯も、ふがひないと言へば、ふがひない様なもの、それでも鶯である事は、動かし難い事實だ。「ほう……」といふ最初の歌聲まで九官鳥は眞似る事があるかも知れない。またその「ほう……」といふのまでこの鶯は言はなくなつて、黙々として唯籠のうちに四邊を見廻す様になつてしまふかも知れない。

「どちらの生活が幸福なのですかね。」  
「お伽噺みた様な問答ですね。」

わたしは且君とこんな事を言つて、新しく運ばれた紅茶を飲んでんだ。



(一)小説家。名は哲夫。兵庫縣の一人。明治三十八年。三十八年。四十年。

〇二九 忘れ得ぬ人々

國木田獨歩<sup>(一)</sup>

忘れ得ぬ人は必ずしも忘れてはならぬ人ではない。親とか子とか、または朋友知己、その他自分の世話になつた教師、先輩などは、畢竟單に忘れ得ぬ人とだけは言へぬ。忘れてはならぬ人と言はなければならぬ。然るに、茲に恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本來を言ふと忘れてしまつた所で、人情も義理も缺かないもので、しかも終に忘れてしまふ事の出来ない人がある。世間一般の者に必ずさういふ人があるとは限るまいが、少くとも僕にはある。

恩愛の契  
赤の他人

一昔

僕が十九歳の春の半ば頃と記憶してゐる、少し體の工合が悪いので、暫時保養する氣で、東京の學校を退いて國へ歸る、その途中の事であつた。大阪から例の瀬戸内海通ひの汽船に乗つて、波穩かな春の内海を航したが、殆ど一昔の前の事であるから、僕もその時の乗合の客がどんな人であつたやら、そんな事は少しも覚えてゐない。多分、僕に茶を注いでくれた人もあつたらうし、甲板の上で色々と話しかけた人もあつたらうが、今は何も記憶に残つてゐない。何でもその時は健康が思はしくないので、餘り浮きくしなないで、物思に沈んでゐたに相違ない。絶えず甲板の上に出て將來の夢を描いては、この世に於ける人の身の事なども思ひ續け

二九 忘れ得ぬ人々

一五



てゐた事だけは、今でも臚に記憶してゐる。勿論若い者の癖で、それに不思議はないが。

春の日の長閑な光が油の様な海面に融け、殆ど小波も立たぬ中を、船は心地よい音を立てながら、水を切つて進んで行く。それにつれて、霞のたなびく島々を迎へては送り、送つては迎へて、右舷、左舷の景色をその時僕は眺めてゐた。菜の花と麥の青葉とで錦を敷いた様な島々が、宛然霞の奥に浮いてゐる様に見える。そのうちに、船が或小さな島を右舷に見て、その磯から十町とは離れない沖を通るので、僕は欄にもたれて、何心なくその島を眺めてゐた。畑もなく、家らしい物も見えない。寂として寂しい磯の退潮の跡が日に輝いて、

錦

五世

ちよつと、細い物

宛然

寂

水際

やがて

小さな波が水際を弄んでゐるらしく、長い線が白刃の様に閃いては消える。無人島でない事は、その島の山よりも高い空で、雲雀の啼いてゐるのが微に聞えるのでわかる。田畑ある島と知れけり揚雲雀。僕の老父のこの句を思ひ出して、山の彼方には人家があるに相違ないと僕は想像してゐた。と見るうち、退潮の跡の日に閃いてゐる所に、一人の人のゐるのが目に附いた。確かに男である。さうして子供ではない。何か頻りに拾つては籠か桶かに入れてゐる。僕はこの寂しい島蔭の小さな磯に漁つてゐる人をじつと眺めてゐた。船が進むにつれて、人影が黒い點の様になつてしまつた。やがて磯も山も島全體が霞の彼方に消えてしまつた。その後、

(一サウ)

(とりまをはず)



(一)愛媛縣温泉郡松山市の埠頭となつてゐる。

今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度この島蔭の顔も知らないその人を憶ひ起したらう。これが僕の忘れ得ぬ人々の一人である。

その次は、四國の三津が濱に一泊して、汽船を待つてゐた時の事である。夏の初と記憶してゐる。僕は朝早く旅宿を出たが、汽船のくるのは午後だと聞いたので、この港の海岸や町を散歩した。奥には松山市を控へてゐるだけ、この港の繁昌は格別で、別して朝は魚市が立つので、魚市場の近傍の雑沓は非常であつた。大空は名残なく晴れて、朝日が麗かに輝き、光る物には反射を與へ、色のある物には光を添へて、雑沓の巷を更に賑々しくしてゐた。呼ぶ叫ぶ喚く、笑聲歡呼嬉々

雑沓

咆哮

言はずもがな

(鰻)

として此所に起れば、咆哮怒罵亂れて彼方に湧くといふ有様で、賣る者、買ふ者、老若男女、何れも忙しさうに、遽しさうに、面白さうに、嬉しさうに、駈けたり追つたりしてゐる。露店が並んで、立食の客を待つてゐる。賣つてゐる品は言はずもがなで、食つてゐる人たちは大概船乗にきまつてゐる。鯛や、比目魚や、うなぎや、章魚がそこらに投出してある。腥い臭が人の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を打つ。

僕は全くの旅人で、この土地には何のゆかりもない身だから、知る顔もなければ、見覺のある禿頭もない。そこでこれ等の光景が何となく異様な感を起させ、世の中の有様を一段と鮮に眺めさせる様な心地がした。僕は殆ど自己を忘れ



て、この雑沓の中をぶらぶらと歩き、稍静かな街の一端に出た。

すると、すぐ僕の耳に入つたのは琵琶の音であつた。其所の店先に一人の琵琶法師が立つてゐた。歳の頃は四十を五つ六つも越えたらしく、幅の廣い四角の顔で、丈の低い肥満した男であつた。その顔の色、その眼の光は、ちやうど悲しげな琵琶の音にふさはしく、あの咽ぶ様な絃の音につれて謠ぶ聲が、沈んで濁つて淀んでゐた。巷の人々は一人もこの法師を顧まない。家々の者は誰もこの琵琶の音に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く、浮世は忙しい。

しかし、僕はじつとこの法師を眺めて、その琵琶の音に耳

嗚咽する

巷の人々の心  
から来た音

を傾けた。この道幅の狭い、軒端のそろはない、且忙しさうな巷の光景が、この法師とこの琵琶の音とに調和しない様で、しかも何所かに奥深い調和がある様に感じられた。あの嗚咽する琵琶の音が、巷の軒から軒へと漂うて、勇ましげな賣聲や、喧しい鐵砧の音と雑つて、別に一道の清泉が濁波の間を溜つて流れる様なのを聞いてゐると、嬉しさうな浮き浮きした、面白さうな忙しさうな顔附をしてゐる巷の人々の心の底の絃が、自然の調を奏でてゐるかの様に思はれた。僕の忘れ得ぬ人々の一人は、この琵琶法師である。僕は何故これ等の人々を忘れる事が出来ないのだらう。それは憶ひ起すからである。何故僕は憶ひ起すのだらう。僕



油然

は絶えず人生の問題に苦しんでゐながら、また自己將來の大望に壓せられて、自分で苦しんでゐる。そこで夜更けて獨り燈に向つて靜思してゐると、何だか人懐かしくなつてくる。その時油然として僕の心に浮んでくるのはこれ等の人である。尙詳しく言へば、これ等の人々を見た時の周圍の光景の裡に立つこれ等の人々である。さうして我と他との相違があるか、皆これ生を天地の間に享けて、悠々たる行路をたどる者ではないかといふ様な感懷が、心の底から起つてくる。實にその時は、我もなければ他もない。僕はその時程心の平穩を感じる事もなく、その時程心の自由を感じる事もなく、その時程名利、競争の俗念が消えて、すべての物に

感懷

俗念

對する同情の念の深くなる事はない。

他は自分の方に向つて感ずることも

— 獨歩全集 —

### 三〇 愛國心

大島正徳

(一) 倫理學者。神奈川縣の人。明治十三年生。本能

人情の自然

社會的生活をする事が人の本能であるとするれば、人がその住む所の社會乃至國家を愛する事も、また本能であると言はねばならぬ。いかなる國民もその國を愛さぬ者はない。その方法、その程度には多少の差異はあらうが、國を愛するといふ心に至つては、何れの國民も變りはない。その家族、朋友を愛し、その郷土を愛し、延いてはその國家民族を愛するのは、蓋し人情の自然である。

しかし、國を愛する心があつても、唯盲目的にこれを愛す



自慢心に就いて

自慢心は、  
自慢心は、  
自慢心は、

他國に對する國體の特色は、  
他國に對する國體の特色は、  
他國に對する國體の特色は、

顯彰する

るといふわけにはいかない。各の國民はその國家に就いて、  
それ〴〵自覺する所がなければならぬ。それ故に我々日本  
人は、この愛國心を全うする爲に、立國の大義を明らかにし、  
國體の特徴を辨へ、さうして國體の精華を永遠に發揮する  
事に努めなければならぬ。我々日本人は、この日本といふ國  
家を離れ、日本の歴史を離れては、日本人たる意味をなす事  
は出来ない。我が國が君主國體として萬世一系の天皇を戴  
き奉り、血族親愛の關係に於て、萬國無比の國體を成してゐ  
る事は、我々國民に取つて無上の光榮であつて、天壤無窮の  
皇運を扶翼する事は、實に我々臣民の本分であり、且我々の  
祖先の遺風を顯彰する所以である。

天照大神

排外心

(一)大正九年一月  
世界大戰の終  
つた時大正天  
皇の下された  
詔

非議する

しかし、愛國心に就いて聊か注意すべき事は、それが徒に  
國自慢となり、排外心となつてはならない事である。いかな  
る國も、それ〴〵嚴然たる一大存在である。随つて、國家相互  
の間に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶべきが故  
に他國を卑しむべきではない。かの平和宣言の大詔にも、進  
ンテハ萬國ノ公是ニ從ヒ、世界ノ大經ニ仗リ、以テ聯盟ノ實  
ヲ舉ケンコトヲ思ヒ」と宣はせられたのもこの爲である。我  
我は日本國民として、我が君主國體の最も美しく、最も貴い  
事を信じ、我が國家の隆盛發展を圖る事に努力すべきは當  
然であるが、それだからと言つて、他の國體を猥りに非議し  
てはならない。それ〴〵の國家にはそれ〴〵の歴史があり、



是認する  
國際的良心  
協調

特長があり、またそれらの國民がそれらの國家を愛する念慮に於て、變るべきはずがないからである。恰もどの家の子もその家を愛する念に於て、變りがないはずであるのと同じである。故に互に各その家を愛する心を尊重する様に、相互にその國を愛する心をも是認し、尊重すべきである。これが國際的良心とも言ふべきものである。かくしてこそ萬邦協調して、世界文明の上にその特色美を競ふ事が出来るのである。

— 公民道德 —

國文 卷二終

昭和六年二月十八日印刷  
昭和六年二月二十二日發行  
昭和六年十月九日訂正再版印刷  
昭和六年十月十二日訂正再版發行

國文 奧附  
新制第一版

著者 富山房編輯部

發行兼印刷者 富山房

代表者 坂本嘉治馬

印刷所 富山房印刷部

定價

自卷一至卷八

各金六拾錢

卷九・十

各金五拾九錢



發行所

東京市神田區  
神保町一ノ三

合資

富山房

電話神田代表二七二二、二天番  
振替口座東京五〇一番

5/16







